

# 三重大学人文学部外部評価報告書

第7回 外部評価

「人文学部における地域人材の育成」



2016年11月30日開催

三重大学人文学部



# は　じ　め　に

人文学部長・人文社会科学研究科長

安食 和宏

三重大学人文学部は、1989年に自己点検・評価委員会を設置して、自らの教育・研究活動等について批判的に点検と評価を重ねてきました。その成果は、1993年から2003年にかけて発表した10冊の報告書「三重大学人文学部：現状と課題」として纏められています。こうした自己点検・評価の蓄積を踏まえた上で、外部識者により学部の活動を客観的に評価していただくために、外部評価を開催することとなりました。第1回目の外部評価は、「21世紀に向かう三重大学人文学部」をテーマとして、2000年11月に開催されました。その後は、「社会的貢献」、「高校と大学との連携」、「学びの支援」等をテーマとして、外部評価を開催してきました。今回の外部評価は、第7回目となります。

2016年11月30日、4人の外部評価員をお招きして、「人文学部における地域人材の育成」をテーマとして外部評価を開催しました。今日、地方国立大学には、地元の地域社会で活躍できる人材の育成、地域への貢献がこれまで以上に求められているといえます。地域圏大学としての三重大学の中で、人文社会科学分野の教育・研究を担う人文学部は大きな役割を果たす必要があります。人文学部と大学院人文社会科学研究科におけるこれまでの取り組みと成果を説明した上で、外部評価員のご意見をお聞きして、今後の方向性を考えてみたいと思いました。

当日は、学部と大学院のカリキュラム、授業外での学生支援、そして人材育成のあり方を巡って、非常に活発で建設的な議論を行うことができました。教育関係者として、また民間企業の立場から寄せられた鋭い指摘には、正直なところ、回答に困るものもありました。しかし、異分野間の意見交換は新たな刺激を生むものであり、そこに外部評価の意義があると思われまます。私たちは、今回いただいたご意見を真摯に受け止め、今後の学部運営に生かしていかなければなりません。最後に、今回外部評価員を引き受けていただいた皆様に改めて感謝申し上げます。



# 目 次

|                                  |    |
|----------------------------------|----|
| 2016年度三重大学人文学部外部評価概要             | 1  |
| 第1章 学部理念について                     | 4  |
| 第2章 学部カリキュラムと地域人材育成              | 11 |
| 第3章 授業外における学生支援（インターンシップ、就職支援など） | 18 |
| 第4章 大学院における地域人材育成（「三重の文化と社会」）    | 24 |
| 第5章 質疑応答                         | 29 |
| 第6章 外部評価員の評価                     | 35 |
| 第7章 外部評価員総評                      | 51 |



## 2016年度三重大学人文学部外部評価概要

1. 日 時 2016年11月30日(水) 12時15分～15時30分

2. 場 所 三重大学人文学部 大会議室

### 3. 評価事項

「人文学部における地域人材の育成」

三重大学人文学部は、地元地域の強い要請があって設立された学部であり、これまでも、地域の要請に対応し、地域社会で活躍できる人材の育成に努めてきた。現在、地域圏大学としての三重大学は、大学主導の地域創生に向けて全学的な取り組みを進めており、その主要戦略の1つが「地域人材の育成」である。その中において、人文社会科学分野の教育・研究を担う人文学部が果たすべき役割は大きい。今回の外部評価では、「地域人材の育成」をキーワードにして、人文学部のこれまでの取り組みと成果、そして改革の方向を説明した上で、外部識者の評価をいただき、今後の学部運営につなげていきたい。

#### 【主な評価項目】

- (1) 学部カリキュラムと地域人材育成
- (2) 授業外における学生支援（インターンシップ、就職支援など）
- (3) 大学院における地域人材育成（「三重の文化と社会」）

4. 出席者 外部評価員（五十音順）

- ・ 鮎 京 正 訓 氏（愛知県公立大学法人理事長）
- ・ 東 則 尚 氏（三重県立上野高等学校校長、  
三重県高等学校長協会会長）
- ・ 中 井 茂 平 氏（上野商工会議所副会頭、  
上野都市ガス(株)代表取締役）
- ・ 松 田 健 氏（三重交通グループホールディングス(株)  
常務取締役）

## 人文学部出席者

|         |                     |
|---------|---------------------|
| 安 食 和 宏 | 学部長                 |
| 樹 神 成   | 評議員（評価委員長）          |
| 藤 田 伸 也 | 副学部長（財政部会長・研究支援部会長） |
| 服 部 範 子 | 学部長補佐（教務委員長）        |
| 田 中 亜紀子 | 学部長補佐（広報・地域連携委員長）   |
| 麻 野 雅 子 | 学部長補佐               |
| 遠 山 敦   | 文化学科長（評価委員）         |
| 豊 福 裕 二 | 法律経済学科長（評価委員）       |
| 上 井 長 十 | 学生支援委員長             |
| 山 田 雄 司 | 評価委員                |
| 名 島 利 喜 | 評価委員                |

## 5. プログラム

|             |                  |                |
|-------------|------------------|----------------|
| 1 2 時 1 5 分 | 昼食会（学部紹介DVD上映）   | 学部長・副学部長・評価委員長 |
| 1 3 時 0 0 分 | 開会の辞             | 評価委員長          |
| 1 3 時 0 0 分 | 学部長挨拶・学部理念について   | 学部長            |
| 1 3 時 1 0 分 | 学部カリキュラムと地域人材育成  | 教務委員長          |
| 1 3 時 3 0 分 | 授業外における学生支援について  | 学生支援委員長        |
| 1 3 時 5 0 分 | 大学院における地域人材育成    | 「三重の文化と社会」担当教員 |
| 1 4 時 1 0 分 | 質疑応答             |                |
| 1 4 時 2 5 分 | 休憩               |                |
| 1 4 時 3 0 分 | 外部評価員の評価（各委員10分） |                |
| 1 5 時 1 0 分 | 意見交換             |                |
| 1 5 時 2 5 分 | 閉会の挨拶            | 学部長            |
| 1 5 時 3 0 分 | 閉会の辞             | 評価委員長          |

（司会・進行：樹神評価委員長）



## 6. 資 料

### 【大学・学部案内】

- 三重大学人文学部第5回外部評価報告書〈人文学部における地域連携〉
- 三重大学人文学部第6回外部評価報告書〈質の保証に向けた学びの支援〉
- 三重大学大学案内（2017年度版）
- 三重大学概要（2016年度版）
- 三重大学人文学部案内（2017年度版）
- 三重大学大学院人文社会科学研究科パンフレット（2014年度版）

### 【人材育成と学生支援の関係資料】

- 人文学部履修要項（2016年度版）
- 大学院人文社会科学研究科履修の手引（2016年度版）
- 人文学部におけるFD活動報告書（2015年度版）
- 連続企画「あなたの学び応援します」成果報告書（2011年度）
- 「三重の文化と社会」報告書（2015年度 桑名市）
- 「三重の文化と社会」報告書（2014年度 多気町）
- 大学院人文社会科学研究科地域交流誌「TRIO」（17号）
- 大学院人文社会科学研究科地域交流誌「TRIO」（16号）
- 法律経済学科学生論集（第30号）
- 卒業時・修了時アンケート報告書（2015年度版）
- 就職活動の手引き（2016年度版）
- 「キャリアハンドブック2016」
- 「インターンシップガイド2016」
- 「2016三重創生ファンタジスタ資格」パンフレット

## 第1章 学部理念について

【司会】 今日はどうも委員の皆さま、お越しいただいてありがとうございます。1分時間が早いんですが、皆さんお集まりですので、2016年度人文学部外部評価「人文学部における地域人材の育成」を始めてまいりたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。私は人文学部で評議員をしております、評価委員長ということで、今回、司会進行をさせていただきます樹神と申します。よろしく願いします。

では最初に、委員の先生方のほうから一言自己紹介していただけますでしょうか。近いほうからということで、松田委員のほうから一言よろしく願いします。

【松田委員】 三重交通グループホールディングスの松田でございます。1980年に大学を卒業してから、大学教育というものには縁遠くなっておりますうえ、東京のマンモスの私立大学でございますので、全く三重大学とは様子が違うかと思えます。また、社会人になってからは、駅や乗務員の人事・教育、それから三重交通グループの人事や経営管理などに携わっております。今日は、実際に三重大学のことを教えていただきながら、企業の立場、外から見た、ということになろうかと思えますが何か参考にさせていただけることをお話しできればと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

【司会】 続きまして、中井委員からお願いします。

【中井委員】 皆さん、こんにちは。上野商工会議所副会頭、上野都市ガスの中井茂平と申します。上野都市ガスでは社長をさせていただいております。私は伊賀上野の出身でございます、上野高校を出まして東京の大学へ行き、松田さんと同じように他の会社に入っております、それまでに福岡、札幌という転勤もあったんですが、40でご縁がありまして、地元へ帰ることにしまして、それから24年間、地元の元気というか、それぞれ活発さ、活性化をお手伝いして頑張っております。

そういった点で、本日、三重大学人文学部の外部評価委員ということで、安食学部長からお話を賜りまして、どういうものか分からなかったのですが、外部評価ということでございますし、三重大学、伊賀市では伊賀研究拠点、伊賀連携フィールドともにお世話になっておりますので、ぜひともお手伝いさせていただこうと思っております。

また、送っていただいた冊子はそこそこございまして、これを拝見した限りにおいて、歴史を積み重ねて一生懸命、人文学部という立場の中で三重県、桑名市をはじめ、大紀町

をはじめ皆さま、一生懸命されているんだなということに取りあえずは感服させていただいておりますので、今日はどうかよろしく願い申し上げます。

【司会】 東校長、お願いします。

【東委員】 こんにちは。上野高校の東則尚と申します。本年度、県立学校の校長会の会長をさせていただいています。実は私は今日のテーマ、地域人材の育成ということで、前任校が相可高校というところにいまして、まさに地域と共に歩む学校というものを目指す学校像の一番大事なところに据えていた学校にいました。

それが1つと、自分の学生時代とどうしても比較するところがありまして、今の大学生、随分と違う学生生活を送っているように思っています。かわいそうでもあるし、ある意味、うらやましいと言ったほうがいいかも分かりませんが、高校の視点を通してということが私に求められているところかなと思っています。いろいろなことを考え、申し上げることがあるかも分かりません。よろしく願いいたします。

【司会】 鮎京理事長、お願いします。

【鮎京委員】 鮎京と申します。どうぞよろしく願いします。私は現在は愛知県公立大学法人という、これはどういうことかといいますと、愛知県には2つの県立大学がございまして、1つは愛知県立大学、もう1つは愛知県立芸術大学、この2大学が1法人を形作っておりまして、そこの理事長をしております。

私は専門は法律学で、樹神先生と若いころには同じ研究室で勉強したことがございます。昨年の3月までは名古屋大学で副総長をしておりました。今日の地域人材ということ、私も非常に考えるところがありまして、要するに名古屋大学のような大学でのそれと、今おる県大、芸大というところのそれ、つまり地域化とグローバル化の関係というのをどういうふうに大学としては考えたらいいんだろうかということについて、ぜひ先生方のご意見をお伺いできればと思っています。よろしく願いします。

【司会】 ありがとうございます。では、人文学部側の自己紹介も一言ずつ、人数が多いので簡単にさせていただきたいと思います。学部長から。

【安食学部長】 人文学部学部長を務めております安食と申します。本日はわざわざおいでいただき、ありがとうございます。どうぞよろしく願いいたします。

【司会】 副学部長。

【藤田副学部長】 副学部長の藤田です。よろしく願いいたします。

【司会】 服部先生。

【服部委員長】 教務担当の学部長補佐の服部です。よろしくお願いいたします。

【司会】 発表していただく上井先生。

【上井委員長】 就職支援に関係します、学生支援委員会の委員長をしております上井と申します。よろしくお願いいたします。

【司会】 豊福先生。

【豊福学科長】 法律経済学科長を務めております豊福と申します。よろしくお願いいたします。

【遠山学科長】 文化学科長の遠山と申します。よろしくお願いいたします。

【麻野】 学部長補佐の麻野雅子と申します。よろしくお願いいたします。

【田中】 学部長補佐で広報・地域連携を担当しております田中と申します。よろしくお願いいたします。

【山田評価委員】 評価委員をしております山田と申します。よろしくお願いいたします。

【名島評価委員】 同じく評価委員の名島と申します。よろしくお願いいたします。

【司会】 ありがとうございます。人文学部側は学部長、副学部長に、それぞれの報告者、学科長および学部長補佐、そして評価委員会の委員ということで出席をさせていただいております。

それでは、学部長からあいさつと学部運営の説明をお願いいたします。

【安食学部長】 それでは、座ったままで失礼させていただきます。この後、それぞれの担当のほうから4つの説明が続きます。まずそれをお聞きいただきたいと思いますが、1番目としまして、私のほうからは人文学部、大学院の概要および理念についてというところで簡単にご説明したいと思います。

今回が人文学部としての外部評価の第7回目になります。今ご覧いただいていますように、最初、第1回目は2000年11月でした。それから隔年といえますか、およそ2年ないしは3年に1回ということで続けてまいりました。今日、4人の外部評価委員の方々においでいただきまして、あらためてどうもありがとうございます。ここに来ていただきましてこれからご説明をいたしますが、それに対してぜひとも率直なご意見を頂きたいと思

## これまでの人文学部・外部評価

- 第1回、「21世紀に向かう三重大学人文学部」2000年11月
- 第2回、「人文学部の研究と社会的貢献」2003年9月
- 第3回、「高校と大学との連携」2005年11月
- 第4回、「大学機関別認証評価に基づく教育・学生支援」2007年11月
- 第5回、「人文学部における地域連携」2010年10月
- 第6回、「質の保証に向けた学びの支援」2012年10月

ます。正直なところ、地方国立大学三重大学の一部として、私たち人文学部が何をすべきなのか、もちろんいろいろ議論は続けてきたところではありますが、それが外から見た場合にどのようにとらえられるか、それもまた非常に重要なポイントかと思いますので、その辺りで今日、意見交換ができればと思っております。



まず人文学部は、三重大学の中では割と新しいといえますか、まだ歴史が浅いといえますか、1983年4月に新しく設置されました。当初から2学科体制です。これは今でも変わっておりません。1つは文化学科、それからもう1つは当初は社会科学科という名称でした。ただ、これがやや分かりにくいというか、いろいろ言われておりました、そこで97年段階で文化学科の改組、詳細は省きますが、2005年社会科学科の改組を経て、それから2008年に名称を変えております。社会科学科というのは私たちにとってはいわゆる社会科学なんです、大変分かりにくいということで、2008年段階で法律経済学科と名称を変えました。これが現在に至っております。2012年には文化学科のカリキュラム改革があって、現状としましては当初からの2学科体制は変わっておりませんが、名称としては文化学科および法律経済学科という、その2学科体制です。

ちなみに数でいきますと、文化学科の1年生の入学定員は100名です。法律経済が165名、合計265名です。3年次編入生がおりますので、4学年を合わせますと1100名を超えます。ただ、既に公にしているところではありますが、三重大学の全学的なプランというものもありまして、人文学部は来年から、次の入試から文化学科の入学定員はマイナス8です。それから法律経済学科はマイナス12で、合わせて20の定員減ということになります。

それから教員の数ですが、文化学科の専任教員数は37名、法律経済が28名、合計65名です。実は昔に比べると相当減っております。それはどこの国立大学法人でもそうなんです、予算的に厳しい削減が求められるということで、ほかに特任教員もおりますが、現状で65名です。ただ、それでも教員1人当たりの学生数で見ますと非常に恵まれているといえますか、いわゆる少人数教育、きめ細かな指導体制と書きましたが、それが実現できているだろうと、私たちはそう思っております。



それから理念ということで、あまり言うともた大変かもしれませんが、人文学部規程の最初のところだけ読みますと、「人文学部は、人文社会科学の諸分野において学際的、総合的な教育研究を行うことにより、専門的知識と豊かな教養に基づき、広い視野と柔軟な思考力を持った、地域社会や国際社会で活躍できる人材を育成し、地域文化、地域社会の発展に寄与することを目指す」というのが人文学部規程に明示されております。

今回の外部評価のテーマとしましては、「地域人材の育成」ということですが、これは三重大学全体としてもそうなんですけれども、いわゆる地域圏大学としての三重大学が、地元地域を重視しながら今後の方向を切り開いていく必要があると、そこで人文学部としても地域を重視した、地域で活躍できるような人材の育成というのをこれまで行ってきた、それについてご意見を頂きたいということです。私が先ほど読み上げました規程の中でも既に書いてありますように、人文学部としては、私たちとしては、基本は学際的な総合的なということで、もちろん大学ですので専門性を極めるというのは当然あるんですが、ただ私たちの学部はいろいろな分野の先生がいます、いろいろな興味を持った学生も入ってきます、そこで、割と幅広く学際的かつ総合的な教育研究を行うというのが学部理念として1つあるわけです。

それから文章としましては、地域社会で活躍できるとか発展に寄与することを目指すというのは既に規程に書いてあるとおりですが、学科としても、ちょっと省略しますが、文化学科、法律経済学科それぞれの規程があります。

もう1点お示ししますのは、人文学部のディプロマ・ポリシーです。今、大学はこれをきちんとつくって、それを公表するということになっております。入試の方針がアドミッション・ポリシー、それから大学の教育の方針、それはカリキュラム・ポリシー、それからディプロマ・ポリシーというのを私たちは通称3つのポリシーと呼びますが、ディプロマ・ポリシーというのはいわゆる学位授与の方針です。大学に4年間いて、普通は130単位くらいを取得というのがあるんですが、そういうふうに数えるわけですが、ここの大学でこの学部で学んで何が身に付くかという、私たちはこういう教育をして学生はこういうことを身に付けるはずだという1つの約束事とも言えるかもしれませんが、それを公表しなければいけないということになっております。

文化学科としましては、基本は人文科学ですので、専門的知識、豊かな教養を身に付ける、あとは大事なポイントは世界各地域の文化を学ぶ、広い視野から学ぶ、国際感覚に基づいて行動できると、国際社会と地域社会の発展にも貢献できる、というような項目が並

んでおまして、人文学部の教育によってこういうところを身に付けてもらおうと、そういうレベルまで行くはずだと私たちは考えております。

## 人文学部のディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)

### <文化学科>

1. 人文科学の諸分野の専門的知識と豊かな教養を身につけている
2. 変動激しい現代社会について、専門的知識に基づいて論理的に考え、総合的に判断できる
3. 人文科学諸分野の成果に基づき、世界各地域の異なる文化に関して、広い視野から探求できる
4. 変動激しい現代社会に対する理解を基礎として、国際感覚に基づいて行動できる
5. 自ら学んだ知を、口頭表現や文章表現によって的確に発信することができる
6. 国際社会と地域社会の発展に貢献できる

### <法律経済学科>

1. 法律・政治・経済・経営の諸分野において、専門的知識と豊かな教養を身につけている
2. 現代社会について、専門的知識に基づいて論理的に考え、総合的に判断できる
3. 法律・政治・経済・経営の諸分野を広く学び、学際的視点で問題を捉えることができる
4. 現代社会の課題に挑戦する積極性を備える
5. 自ら学んだ知を的確に発信し、国際社会と地域社会の発展に貢献できる

法律経済学科につきましても、いわゆる社会科学の法律、政治、経済、経営、その諸分野において専門的知識、豊かな教養を身に付けている、学際的視点で問題を探求できる、現代社会の課題に挑戦する積極性を備えるうん

ぬんというところで、あとは自ら学んだ情報を的確に発信するというような表現もありますが、これらは大学外にも公表しているものでありますし、私たちはこのような大きな方針に沿って、教育活動を進めてきたと言えるかと思えます。

次はやや見にくくて申し訳ないんですが、大学院についても簡単に一言申します。大学院の人文社会科学部研究科は 1992 年に設立されました。当初より 2 専攻です。これは修士課程です。博士課程はありません。修士課程のみですが、当初より 2 つの専攻がありまして、1 つは地域文化論専攻、もう 1 つが社会科学専攻です。名称は今でも全く変わっておりません。

当初はちょっと分かりにくいというか複雑な仕組みがありまして、それで 2001 年段階で改革を行いました。社会人の受け入れを重視する、そのために夜間開講、夜の授業を開くということ、それから地域を重視するというので、その辺りはまたこの後説明があります。

もう 1 点、2011 年に改革を行いましたのが、これは定員増ということで、割と倍率が高かったのが、そこで入学定員を増やしました。地域文化論は現状で定員が 8 名、それから社会科学は定員 7 名です。計 15 名です。組織としては、これは現在に至るということで、修士課程の 2 専攻制度という、これは今も変わっておりません。

研究科の規程でいいますと、「人文社会科学の諸分野における高度の専門知識に基づき、狭い専門領域にとらわれず、学際的、総合的な教育研究を行うことにより、複雑化、多様

化する現代社会に柔軟に対応でき、創造的な知性と国際的な視野を持った研究者および専門的職業人を育成することを目指す」ということです。ここでも、先ほど学部のところでも申しましたが、学際的な総合的なというのが1つのキーワードになるかと思いますが、それを基盤としつつこういった人材を育成しますという、そういうふうなうたっております。

これは最後ですが、大学院のほうでも先ほど申しましたディプロマ・ポリシーというのがあります。大学院は通常2年ですが、修士2年の間で勉強してもらって、結果としてこれらの能力を身に付けるということです。

地域文化論の場合は世界各地の固有の文化に関して専門知識と深い学識を備えているうんぬんというところがあります。社会科学専攻は、話は重なりますが、法律、政治、経済、経営、その分野の諸問題に関して専門知識と深い学識を備えているというような表現になっております。

ここまでが学部と大学院の簡単な説明でございますが、学部と大学院の成り立ちと申しますか、それから私たちが行ってきた教育の基本的なところ、それを端的に表すものとしてディプロマ・ポリシーということで説明させていただきました。具体的なのはこの後他の先生方から説明させていただきますので、またよろしく願いいたします。

## 人文社会科学研究科のディプロマ・ポリシー

### <地域文化論専攻>

- 1.世界の各地域に固有の文化に関して、幅広い視野にもとづく確かな専門知識と深い学識を備えている。
- 2.創造的な知性と国際的な視野にもとづく、高度な地域理解をおこなえる能力を身につけている。
- 3.地域文化の理解と発展等に指導的役割を発揮できる。

### <社会科学専攻>

- 1.社会科学(法律、政治、経済、経営)の諸問題に関して、幅広い視野にもとづく確かな専門知識と深い学識を備えている。
- 2.地域社会が抱える課題の解決に貢献する能力を身につけている。
- 3.地域における政策形成、企業活動等に指導的役割を発揮できるようになる。



## 第2章 学部カリキュラムと地域人材育成


【司会】 質疑応答は後ほど時間を取ってありますので、こちらから3人の者からそれぞれ説明をさせていただいて、その後、質疑応答に入りたいと思います。それでは、服部教務員長のほうから学部カリキュラムと地域人材育成についてお願いいたします。

【服部委員長】 それでは、これから外部評価の主な項目のうち学部カリキュラムと地域人材育成について、ご説明させていただきます。

本日取り上げますのは、まず文化学科、法律経済学科の各カリキュラム、次に、地域と関連の深い特色ある授業やゼミとして、これまでの取り組みの幾つかを紹介させていただきます。3つ目に、最後としまして、改革の方向、来年度、2017年度からのカリキュラムの主な変更点についてご説明させていただきます。

それではまず文化学科、法律経済学科のカリキュラム紹介に移ります。人文学部ではどのような科目を学ぶのかということで、文化学科、法律経済学科共に、カリキュラムとしまして、大別して教養教育科目と専門教育科目になっております。教養教育科目としましては、教養統合科目、アクティブラーニング、外国語科目、スポーツ健康科学、情報科学基礎などを履修します。これは三重大学の5学部の学生と一緒に履修することになります。

専門教育のほうは、人文学部としまして、この後学科別に概要を説明させていただきますが、文化学科で82単位、法律経済学科で84単位履修する必要があります。教養教育科目と専門教育科目を合わせて、卒業に必要な総単位数は両学科とも128となっております。



### 人文学部ではどのような科目を学ぶのか？

- 教養教育科目（文化46単位、法経44単位）[2016年度]
  - ・・・5学部の学生と一緒に履修。
  - ・教養統合科目
  - ・アクティブ・ラーニング
  - ・外国語科目
  - ・スポーツ健康科学
  - ・情報科学基礎 など
- 専門教育科目（文化82単位、法経84単位）[2016年度]
  - ・・・人文学部の授業。

では次に、文化学科のカリキュラムについてご説明させていただきます。文化学科では、学生は4つの地域、すなわち日本、アジア・オセアニア、ヨーロッパ・地中海、アメリカのいずれかの地域に所属します。そしてカリキュラムポリシーとして挙げておりますが、その所属した地域の文化を哲学、歴史学、社会学、文化人類学、地誌学、美術史、言語学、文学、図書館・情報学といった学問分野から、専門的、総合的に学ぶことのできるカリキュラムを用意しております。その地域を決定するのは1年次終了時です。地域選択に至る

段階と卒業までの道筋を次のスライドでご紹介いたします。

入学してすぐに文化学科では、1年次前期に教養教育として少人数のスタートアップセミナーを受講し、ここで文化学科における学問研究の基礎を学びます。1年次後期は地域文化研究総論を履修することで、地域文化研究の在り方と4つの地域に関する概括的な知識を得ます。こうして文化学必修科目（基礎）と先ほどのスライドで紹介しました教養教育科目を履修します。1年次終了時に所属地域を決めた後は、2年次前期で4つの地域それぞれに分かれて、所属する地域の地域文化研究を履修します。2年次後期には専門的な知識をセミナー形式で能動的に身に付けるために文化学セミナーを履修します。こうして文化学必修科目を基礎から発展へと段階を追って履修していきます。3年次以降はより専門性を深め、卒業論文作成へとつなげていきます。

専門教育の内訳を示す1つの例としまして、日本地域を選択した場合の例ですけれども、日本研究を選択した場合は、地域必修科目としまして今ご覧いただいております科目を学ぶこととなります。これがアジア・オセアニア地域ですと、それぞれアジア・オセアニア地域の思想、歴史、言語というふうになります。専門分野としましては、ご覧いただいておりますような分野を学ぶことができます。3年次から指導教員のもと、卒業論文作成に向けて専門性を高めていきます。

そのほかに、文化学科では幾つかの資格を取得することが可能です。種類としましては、教員免許は中学校教諭一種、高等学校教諭一種。教科としましては国語、社会（高等学校の場合は地理歴史、公民）、そして英語です。そのほかには、学校図書館司書教諭とか図書館司書、学芸員の資格も取得することができます。例年、教員免許は30名程度が取得しております。図書館司書は20名ほどが所定の単位を取得しております。学芸員は20名程度が実習に参加しております。

次に、法律経済学科のカリキュラムに移ります。法律経済学科は法政コースと現代経済コースの2つのコースと4つの履修プログラムを用意しております。法政コースでは、学生は法学や政治学といった学問分野を中心に学び、法律や行政・政治に関する知識、リーガルマインド、政策立案能力を身に付けます。現代経済コースでは、学生は経済学や経営学といった学問分野を中心に学び、経済や経営の基本的な仕組みを理解することで、未来を切り拓き、現代社会で通用する専門性を身に付けます。学生は2年次前期終了時にコースとプログラムを決めます。

法律経済学科も1年次前期に教養教育で少人数でのスタートアップセミナーを履修し、


大学での学びの方法を身に付けます。1年次後期には基礎総合科目 A・B を履修して、どのような専門科目を学ぶのかの全体像を理解します。1年次後期から2年次前期にかけて、憲法、民法総則、政治学原論、経済原論などの専門基礎科目を学び、その過程で学生は2年次後期以降どのような専門分野に立脚して勉学を進めていくのかを決めます。2年次前期末に3年次以降所属するゼミを選択し、それに応じて法政コース、現代経済コースへの所属が決まります。それ以降、演習で専門性を深めて、卒業論文作成へとつなげていきます。

法律経済学科の学生も、4年間でご覧のような科目を段階を追って履修することで専門性を深めていきます。具体的に法律経済学科で学べる専門科目としまして、左側には法政コースの2つの履修プログラムを、右側には現代経済コースの2つの履修プログラムものを挙げております。ここまでが2つの学科のカリキュラムの説明となります。

それでは次に、地域と関連の深い特色ある授業やゼミということで、これまでの取り組みを説明させていただきます。今回、時間の関係で紹介させていただきますのは文化学科から2つ、法律経済学科から2つなのですが、あらかじめ配布させていただいております

2012 年度の人文学部の外部評価報告書では、少人数教育と現地調査型授業として、写真入りで今ご覧いただいております5つの演習を紹介しております。

この5つの授業は今も現地調査型で進行中ですので、今回はこれら5つのゼミに加えて、新規に4つの演習を紹介させていただくこととなります。ちなみに日本歴史演習では、授業で論文を輪読し、基礎知識を得た後、現地、この場合は熊野ですけれども、学生は古文書調査に当たっております。そのほかの演習でも学生は課外授業としまして、県内の市町村や工場



**地域と関連の深い特色ある授業やゼミ**  
 第6回 外部評価 (2012年度)  
 「三重大学人文学部外部評価報告書」より

- 「日本歴史演習」 (担当:塚本 明)
- 「マーケティング論演習」 (担当:後藤 基)
- 「産業経済論総論演習」 (担当:豊福裕二)
- 「金融論演習」 (担当:野崎哲哉)
- 「経営学総論演習」 (担当:青木雅生)



**「地域環境論」 (担当:安食和宏)**

- 地理学的視点より、三重県南部地域を対象として、現状と課題を学ぶ。
- 地域活性化の方法を考え、レポートにまとめて発表。



写真上: 世界遺産・熊野古道を歩く  
 写真右上: 樹枝を利用した宿泊施設を訪問  
 右下: 熊野(道町)の町並みの撮影



を見学、調査して、その土地固有の問題を理解し、解決策を模索しております。

それでは、今回、新規で紹介させていただきます4つの授業の1つ目を紹介させていただきます。まず最初の事例としまして、安食教員による地域環境論です。この授業では、学生は地理学的な視点により、三重県南部地域を対象として現状と課題を学び、地域活性化の方法を考え、レポートにまとめて発表します。写真左は、授業の一環として世界遺産熊野古道を歩いたときのもの。写真右は、廃校を利用した宿泊施設を訪問。右下は魚まちの街並みの観察の様子です。

2つ目の事例としましては、小澤教員による考古学実技演習です。授業では野外、左上の写真は三重大のキャンパス内ですけども、測量実習、それから教室内では遺物実測、拓本の作成など演習を行っております。授業で身に付けた実技を生かして、齋宮歴史博物館の調査アシスタントとして、齋宮の発掘調査に参加する学生もおります。また、県内外の遺跡見学、それから臨地講義を随時実施したり、市民の方々と一緒に壬申の乱ゆかりの地や遺跡を巡るウォークというのも年数回実施しております。このように学生は教室で得た知識、実技を地域の遺跡調査、研究に還元したり、研究室として市民の方々の知的好奇心を刺激する活動にかかわっております。

3つ目の事例としましては、朝日教員の地域経済論、財政学です。過去10年間にわたって四日市市から三重大学人文学部に委託されております四日市市・市民大学「21世紀ゼミナール」の運営に関して、学生は資料の準備から受付、会場準備、片付けまで協力しています。そのほかには、あすなろう

線活性化プロジェクトとしまして、学生は今後の調査のための視察を行っています。



また、尾鷲市地場産業の交流研修としまして、一番右の写真ですけれども、尾鷲市紀北町での大学生企業見学会。これは県内の大学生に就職先の選択肢として尾鷲市の地場産業を考えてもらうための企業見学会ですけれども、これに学生が毎年参加しております。

4つ目、最後の事例ですけれども、伊藤教員による刑事訴訟法演習です。左上は、模擬裁判のシナリオを作って、毎年8月の人文学部オープンキャンパスで実演しております。毎年この模擬裁判には多くの高校生が聞きに来まして、真剣に聞いております。

そのほかには冤罪事件の現地調査や弁護士、支援団体との勉強会に学生が参加しています。近隣の大学、南山大学や愛知学院大学で同じように刑事訴訟法を学んでいる学生との合同ゼミも開催して、東海地区での学生同士の交流を図っております。また、津地方裁判所とのコラボ企画としまして、模擬評議を行っており、学生は裁判員として参加しております。

以上が地域と関連の深い特色ある授業、ゼミ、4つの紹介でした。学生は教室での勉強を踏まえて県内の各地に出掛けて、見て、聞いて、考えるという体験をしております。

それでは最後に、今後の改革としまして 2017 年度、来年度からのカリキュラムの主な変更点について説明させていただきます。地域社会が求める人材育成の強化、現代的課題に対応できる学際的・

実践的教育の強化を目指して、カリキュラム改革に取り組みます。その1つとしまして、来年度入学の1年生全員必修に「地域から考える文化と社会」を新設します。

主な変更点の2つ目は、1、2年次向けに専門 PBL セミナーというものを新設します。今日は、今回の外部評価の項目に関連する科目として、1 番目の「地域から考える文化と



### 3. 今後の改革： 2017年度からのカリキュラムの主な変更点

- 地域社会が求める人材育成の強化、現代的課題に対応できる学際的・実践的教育の強化を目指してカリキュラム改革に取り組む。  
(1) 1年次学生向けに「**地域から考える文化と社会**」  
〔全科目必修〕を新設。  
(2) 1～2年次学生向けに「**専門PBLセミナーA、B**」  
〔全科目必修〕を新設。

社会」についてももう少し詳しく説明させていただきます。

実は来年度からの新設に向けて、本格的導入に向けて本年度後期、10月から特殊講義「地域から考える」という授業を立てて、1年次学生に選択科目として提供しております。その内容を紹介させていただきます。

授業の概要は、三重県および東海圏を中心に、地域の抱える社会的諸課題や地域固有の文化について知るとともに、それらを理解する上で不可欠な学問的視点について学ぶというものです。学習の目的としましては、実際に地域で活躍しておられる社会人の方々や地域をフィールドに研究している教員の話聞いて、地域の抱える社会的諸課題、地域固有の文化について知るとともに、それらを理解する上での学問的視点の大切さを理解する。また、社会人による講義を通じて、将来の進路に関する問題意識を持つというものです。

講義で取り上げるテーマの幾つかを紹介させていただきます。例えば「地域政策の立案と取組み」、そして「三重県における子ども・家庭支援について考える」というテーマの下では、三重県庁の職員の方をゲストスピーカーにしております。「地域と共に生きる企業」では、県内の会社社長さんをゲストスピーカーとしてお招きします。また、「多文化共生を考えるー日本語を母語としない児童の多い地域での放課後教育支援」というテーマのときには、民生委員、それからこのテーマの下で地域で活躍していらっしゃるリーダーをお招きします。

そのほかのテーマとしまして、「地域の防災体制を考える」、「農村地域の活性化を考える」、「伊賀の忍者と忍者研究について」、「三重の文学と文学を用いた町おこしについて」などを用意しております。いずれも学生は地域固有の問題を認識し、解決方法について講師と一緒に模索するというプロセスを体験することになります。

来年度新入生から、両学科1年次全員必修としまして、「地域から考える文化と社会」を新設いたします。授業の形態としましては、まず5回分は両学科共通の授業としまして、本年度試行的に行っておりますようなゲストスピーカーもお招きして、講演を開催します。残り10回分は文化学科、法律経済学科それぞれが開講して、その半分ずつを乗り入れるという形態を取ります。この「地域から考える文化と社会」の授業の新しい授業形態により、地域の具体的な課題を多角的にとらえることのできる人材の育成につなげていきたいと考えております。

以上、学部カリキュラムと地域人材育成ということで、大きく3つの観点から説明させていただきました。このように人文学部は地域社会が求める人材育成の強化、現代的課題

に対応できる教育の強化を目指して、カリキュラム改革に取り組んでおります。地域圏大学としての三重大学の1つの、しかし重要な学部として、今後もカリキュラムを工夫して、地域人材育成に積極的に取り組んでまいりたいと考えております。以上です。どうもありがとうございました。



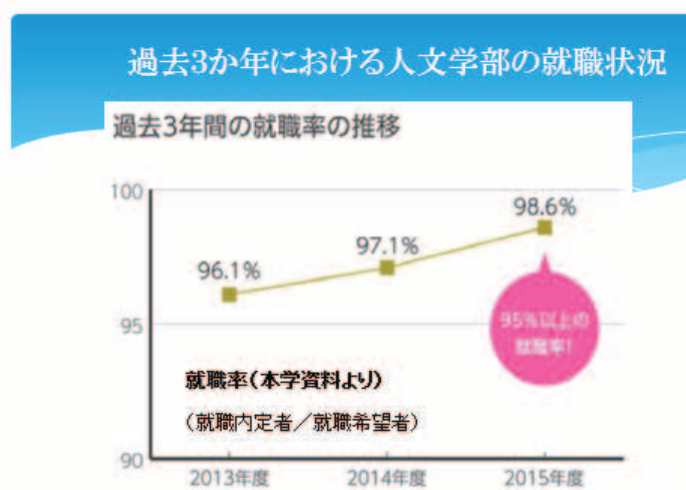
### 第3章 授業外における学生支援（インターンシップ、就職支援など）

【司会】 では、続きまして上井学生支援委員長のほうから「授業外における学生支援について」について説明をいただきたいと思います。ちょっと時間が押しておりますので、簡潔にお願いいたします。

【上井委員長】 それでは私から、「授業外における学生支援について」と。授業外というふうにタイトルではなっているんですが、就職支援に関する授業も開講しております、その話も含めて授業内外というか、就職支援に特化した授業および就職支援に関する授業外における学部の取り組みというふうなことについて、ご説明いたしたいと思います。

その前に、まず人文学部における就職状況を説明いたしまして、その後人文学部の取り組みというものについて紹介させていただきたいと思います。最後にキャリア支援センターの紹介とありますけれども、これは全学の取り組みで、どうしても人文学部の中では就職支援に特化した形の専門のスタッフというものをいろいろな都合があって置くことができませんので、全学のほうのキャリア支援に特化したスタッフの力を借りて、就職活動に関する技術的、専門的なアドバイスなどはそちらのほうにお任せするということになっておりますので、人文学部と全学のキャリア支援センターとの連携という形で就職活動のバックアップというものを行っている。その話も簡単に最後紹介させていただきたいと思います。

それではまず過去3カ年における人文学部の就職状況ということで、このグラフを見ていただくと、昨年度が98.6%、その前が97.1%、その前が96.1%ということで、95%以上という高い就職率を維持しているという現状であります。



内訳ですけれども、これは昨年度の人文学部の就職状況ということでパーセンテージでお示ししておりますが、就職希望者の就職率というものがここにありますが、これは就職活動をするということで就職希望者の数が母数としてあるわけですが、それに対



して実際に就職した人数というものが分子ということで、法律経済学科は 100%ということで、就職希望者全員が就職したというのが去年の実績となっております。合計は 98.6%が就職率ということになります。

実際のどういう企業あるいはどういう地域に就職したかという資料をお示ししたいと思いますけれども、地域ということで何を地域というふうにとらえるかは難しいところなんですけれども、東海圏というところで見ただくと、三重県と愛知県と静岡県、岐阜県、東海圏、これを単純に足しますと 63 名になります。70%の学生が東海圏に就職している。あと関東地方、近畿地方ということで 71 名、23 名とありますけれども、実際にそれらの地域のほうに行って働くという学生と、本社がそちらにあって働く先は三重県とか愛知県といったような、そういう学生も本社でこれは分類していますので、関東地方、近畿地方の中にはそういう学生も含まれております。

就職状況の具体的な分野ですけれども、製造業、情報通信、卸、小売、金融など、それぞれさまざまな分野に就職している。あと公務ですけれども、これは 73 名ということで 4 分の 1 を公務関係が占めているという状況であります。

これは先ほどの進路内訳ですけれども、ここ 3 年間の進路内訳の状況ですけれども、大体先ほどの、資料をちょっと行ったり来たりしますけれども、資料と比較していただくと、この 3 年間で業種別のパーセンテージというのはほぼ変わらず、このようなパーセンテージがそれぞれの企業あるいは公務関係に進路が進んでいるという状況であります。

具体的な過去数年の主な就職先でございますが、企業のほうは三重県内、三重県外、それぞれ主な就職先でありますけれども、このようなところに多く就職していると。これが一般企業で、次にこれが公務関係ですけれども、国家公務員、その他の団体とそれぞれありますけど、地方公務員、県庁、市役所、県警、検察、行政と。この真ん中の地方公務員が公務関係では就職先としては多いという状況で、ちなみに三重県庁、愛知県庁を第 1 志望にする学生が多いのではないかというふう

## 人文学部の就職先 (1)

過去数年の主な就職先 (一般企業)

|  |  |
|--|--|
| <p><b>三重県内</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>*百五銀行 *三重銀行 *第三銀行</li> <li>*北伊勢上野信用金庫</li> <li>*三重県信用農業協同組合連合会 (JAバンク三重信連)</li> <li>*三重県厚生農業協同組合連合会 (JA三重厚生連)</li> <li>*三重電子計算センター</li> <li>*三重県中小企業団体中央会</li> <li>*三交不動産</li> </ul> | <p><b>三重県外</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>*名古屋銀行 *中京銀行</li> <li>*イオンデパート *八神製作所</li> <li>*住友生命 *日本生命</li> <li>*三井住友海上火災保険</li> <li>*中部電力 *東邦ガス</li> <li>*愛知県厚生農業協同組合連合会 (JA愛知厚生連)</li> </ul> |
|--|--|

地元での就職を望む学生が多く、東海圏での就職が7割程度。金融業・保険業をはじめとする各種産業に就職。

## 人文学部の就職先 (2)

過去数年の主な就職先 (公務員関係)

| 国家公務員   | 地方公務員   | その他団体  |
|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>*国税庁</li> <li>*厚生労働省労働局</li> <li>*名古屋検疫所</li> <li>*名古屋入国管理局</li> <li>*裁判所事務官</li> <li>*名古屋税関</li> <li>*中部地方整備局</li> <li>*法務省検察庁</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>*県庁(三重・愛知・石川・富山・滋賀・奈良・和歌山・徳島・香取、他)</li> <li>*市役所(津、四日市、桑名、伊賀、鈴鹿、亀裂、松阪、名古屋、豊田、豊橋、大垣、刈谷、大府、富田、神部、新羽、小松、他)</li> <li>*県警、警察行政</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>*三重大職員</li> <li>*日本司法支援センター</li> <li>*日本郵便</li> <li>*日本赤十字三重県支部</li> <li>*JA三重中央、JAJAいち中央、他</li> <li>*国立病院機構</li> </ul> |

人文・社会科学全体の知識を身に付けていることが前提となる公務員を志望する学生が多い。最終的に公務員関係には全体の4割近くが就職。あまて民間企業に就職せず、卒業後、再チャレンジして採用試験に合格する者もいる。

に思います。

ここまでは就職状況ですけれども、次からは人文学部が取り組んでおります就職活動に向けたキャリア支援というものについて、どのような取り組みをしているのかということについてご紹介させていただきたいと思います。今画面に映っているのは就職ガイダンスというものでございますが、そのほかに就職支援講座、これは大学の授業ですけれども就職支援講座、この後スライドでご紹介しますけれども、就職支援講座、会社説明会とか学部教員による個別相談会といった4つのことを人文学部独自に行っております。

まず就職ガイダンスというものですが、これは2016年12月7日となっておりますけれども、毎年この時期、冬休みに入る前の12月の第1週、第2週辺りに就職ガイダンスというものを行っております。この取り組みは、ここ10年間このような取り組みを継続して行ってまいっております。中身はどういうものかという、いろいろプログラムはあるんですけれども、目玉となるものは、今現在内定を得ている4年生がこれから就職活動を行おうとする3年生に対してさまざまなアドバイスを行うということです。

4年生は、50名から60名の企業あるいは公務関係に内定を得ている4年生が、この写真でありますように、個別に3年生に向けて、例えば就職活動の解禁は6月ということになっているけれども実はこの企業ではこうなっているとか、そういう裏話も含めていろいろなことについて、4年生が3年生に対して情報提供を行う。あるいはこの企業ではこうい

う仕事を行うんだといった、企業紹介といったことも具体的に4年生が3年生に対してアドバイスを行うということで、午後の13時から16時半とありますけれども、3時間ぐらいの時間を使って、3年生と4年生との間で個別にこういうふうな相談会を行う。学部生、先輩、後輩同士でこういう相談会、アドバイスといったものを行うという活動。これが就職ガイダンスという形で人文学部独自に行っております。

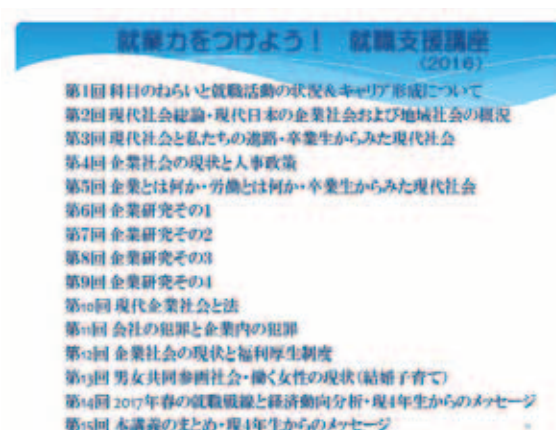
同様の就職ガイダンスについては、人文学部の取り組みもあるんですけど、全学的な取り組みとしてもこういう就職ガイダンスというものを行っているんですけれども、それとはまた別に人文学部独自にこういう就職ガイダンスというものを毎年この時期に行っております。

人文学部におけるキャリア支援

1. 就職ガイダンス

人文学部学生支援委員会主催  
\*日時:2016年12月7日(水)13時~16時30分  
\*場所:三重大学三翠ホール  
\*タイムテーブル  
13:00~14:10  
就職状況等の説明, 4年生就職活動  
14:20~16:30  
4年生との就職懇談会・個別相談会

次に就職支援講座ということで、これは学部の講義で単位が出るものですが、これから就職活動を控えている3年次に配当されている選択科目の1つとして、就職支援講座というものを開講しております。そこに書いてあるとおりになんですけど、人文学部の専任教員と人文学部出身のOB、OG、あるいは企業の人事担当の方などにお越しいただいて、さまざまな講義を行っていただく。



人文学部の教員については、例えば福利厚生の話とか、労使関係の労働契約とはどういうものなのかとかといったような法律的なレクチャーをすとか、そういうふうなところ、あるいは企業の動向といったようなことについていろいろとレクチャーを行う。OB、OGなどについても、それぞれが就職した就職先の企業の紹介とか働くことの意義といったようなものなどもOB、OGからいろいろとレクチャーしてもらおう。企業の人事担当の方々にもお越しいただいて、企業がどういう人材を求めているのかといったことなどを学生に講義していただく。

この講義を通して3年生の学生は働くということなのとか、今後の就職活動に向けて自分がどういうことをしなければいけないのかといったことなどを学んでいく。そういうふうな特別の授業というものを開講しております。これが3年生後期の配当科目ということで、このような講座を開講しております。

内容はこうすることで、第1回から第15回までありますけれども、こういうテーマでわれわれのスタッフ、教員、OB、OG、企業の方、それぞれ講義を担当していただくというところを行っております。

次に会社説明会というもので、これも全学的にさまざまな企業の方に来ていただいて会社説明会というものを全学的な形でも行っているんですけども、人文学部が主催となって、人文学部の人材を欲していると、そういう企業が人文学部にお越しいただいて、それぞれの企業の会社説明会というものを開催している。これはとりわけ人文学部出身のOB、OGがそれぞれの就職先に就職するわけですが、それぞれの人事担当になっている場合には、人文学部に来てぜひわれわれの会社に入らないかということで会社説明会というものをを行うということ、人文学部でも独自にこういう会社説明会というものを行っております。

これはその会社説明会のパンフレット、チラシですけれども、こういうものを校舎の1階の学生フロアなどに掲示して、告知とアナウンスしております。

4番目ですけれども、学部教員による個別相談会ということで、時期を見ていただくと7月5日から7月13日と、今年はこの時期に行ったんですけれども、例年この時期に行っているんですが、これはどういうことかということ、就活が解禁になった後なかなか思うとおりに就活が進まないといったような学生で、いろいろ悩みのある学生に対して、個別に学部の教員、就職支援、学生支援委員会の教員が中心となって、個別相談に応じるといったような企画をこの時期に行っております。

学部の専任教員が説明できることも限界がありますので、就職活動に関する技術的なこととかより専門的なことについては、全学のほうのこれから説明いたしますキャリアセンターのほうに行って、いろいろ話を聞くようにということで、直接事務の方に付き添っていただいてキャリア支援センターのほうに行って、こちらのほうでより詳しい個別相談というものも行うということで、ちょっと就職活動に乗り遅れてしまったという学生を対象に、個別にフォローするとかバックアップするといったような活動も人文学部で独自に行っております。

これはキャリア支援センターということで、全学の組織なわけですけれども、ここではキャリア教育とかインターンシップ、就職支援事業といったことなどを行っております。これは全学的なことですので、インターンシップなどについても全学で取り組んでいて、人文学部独自にはインターンシップは行ってなくて、全学のほうでインターンシップについてはとりまとめなどを行ってもらっている。

就職支援事業といったようなことで、就職相談やミニ講座、面接のやり方とか、そういうもののレクチャーというものをこちらの就職支援センターのほうで行っていただいている。就職相談というものもこのような形で個別に相談ということを行っております。これが全学の取り組み。

最後は蛇足なんですけれども、三重大学人文学部は就職に強いということで、『東洋経済』辺りの資料を見ていただくと実就職率ランキングというところで、三重大学全体ですけれども13位にあって、特に人文系。文と人文ということでちょっと分け方が文学系寄りなのかなというふうにも思うんですけれども、文・人文系では三重大学は順位としては4番目の就職率だということで紹介されています。

ということで、就職ということでいくと、さまざまな専門教育などを受けた後、そのよ

うなものを踏まえて自分の就職先、どういうところに就職して自分がどのように社会に貢献していこうかということを経験教育の中でいろいろ自分で考える。あるいは就職支援講座などを受けて、実際自分に適している仕事というものはどういうものなんだろうかということ、3年生の後期の3カ月、4カ月でじっくり考えると。そういうことを踏まえて就職活動を行うというスケジュールになっております。

駆け足でしたけれども、このようなことで、就職支援に関しての人文文学部の取り組みということについて説明させていただきました。ありがとうございました。



## 第4章 大学院における地域人材育成（「三重の文化と社会」）

【司会】 ありがとうございます。14時10分から質疑応答の時間が、15分という短い時間ですが取ってありますので、分かりにくかった点はそのときにご質問いただければと思います。

ということで、14時10分をめぐりに、豊福教員のほうから大学院における地域人材育成ということで説明をお願いします。

【豊福学科長】 私のほうからは大学院における地域人材育成ということで、特に特徴的な科目で「三重の文化と社会」という教科についてご説明したいと思います。

この科目は、先ほど学部長のほうから紹介がありました、大学院改革を2001年度に行いまして、そのときに特に地域人材育成を意識をしまして、社会人の受け入れと夜間開講ということをやりました。それに伴って作られた科目でございます。

この科目は、文化学科の地域文化論専攻と法律経済の社会科学専攻の両専攻に共通の科目という形で設置をしまして、かつ夜間開講の院生の方も受講できるようにということで、この科目に限っては夜間に集中講義という形で、月1回ぐらいのペースで開講されています。通年開講、4単位の科目ということで、両専攻の教員が各1名で、合計2名で担当するという形で開講しております。

科目の目的としましては、三重県の文学、歴史と思想社会等々と書いてありますけども、要は大学院生が自分の専門の知識を生かして、三重県地域の文化と社会の特色を明らかにするという事です。地域から課題を自ら発見する、それに対して自分なりの独自の調査に基づいて実態を把握すること、さらにそれを通して地域社会の人々と交流を深めること、さらには調査結果を地域に還元するというもので、その意味では、大学の地域連携と教育とを融合するという事で作られた科目であります。

科目の特色といたしましては、毎年、三重県内の特定の市町を対象地域と定めて、そこでフィールドワーク、すなわち実地調査を行うということを中心としています。フィールドワーク、実地調査に関しましては、専門分野によってさまざまなやり方がありますけれども、

いずれにせよ対象地域に院生が赴いて

### 科目の目的

- 三重県の文学・歴史・思想・社会・地理・環境・地方制度・地域産業・経済などを総合的に考究し、**三重県地域の文化と社会の特色を明らかにする。**
- 地域から課題を自ら発見すること、それに対して自分なりの独自の調査に基づき実態を把握すること、さらにそれを通して**地域社会の人々と交流を深めること**、を目的とする。  
—大学の地域連携と教育との融合。

調査をするということを位置付けています。

ただ、院生の専門分野によっては、必ずしも実地調査というスタイルではないものもあるわけで、例えば哲学、思想であったり法律であったり、そういった分野の院生はなかなか受講しづらいということもありましたので、9年前からは必ずしもフィールドワークによらない、ただし三重県を対象としたテーマということで、文献指向型という形態でも受講できるようにいたしました。ただ、その後の傾向を見ていますと、文献指向型であっても、大抵はその地域をテーマにするような研究が中心になっているかなというふうに思います。

開講以来、県内の16の市町を対象にこれまで行ってまいりました。最初は合併前の香良洲町から始まりまして、合併前の長島町、その後は今年の志摩市まで、計16回行っているというところでございます。



お手元の青い資料、この一番後ろに別の資料で、市町ごとの研究テーマ一覧というものをお付けしております。スライドのほうにはありませんので、またお時間がありましたらご覧いただければと思います。

科目の特色としましては、もう1つは対象市町のほうからも協力をお願いしたいということで、とりわけ最初に予備調査という形で院生が実際に調査する前の少し予備的な調査をやっておりますけれども、そのためのアレンジをむしろ市町のほうにご協力をお願いし

## 科目の特色②

- 対象市町の協力
  - ①予備調査の実施
  - ②現地発表会の開催
- 調査・研究成果の地域還元
  - ①報告書（論文集）の作成
  - ②『地域交流誌』TRIOへの研究成果の掲載
  - ③現地発表会の開催

ています。また、最終的な発表会の会場をお借りしたりというところで、その点でも協力をお願いしています。

それから、こちらとしましては研究成果をきちんと地域に還元するというので、3つぐらいの方法で還元を行っているということです。それぞれについては後ほど説明したいと思います。

少し講義の進め方に沿ってご紹介いたしますと、毎年、前年度の3月ごろに、来年度はどここの市町にするかということで担当教員で相談をしまして、実際に市町にご協力をお願いしたいということで依頼にまいります。そこで市町で窓口になっていただく担当の部署の方、職員の方を確保しまして、その後はその方と連絡を取り合うという形で進めていきます。

4月に、まず履修をしたいという院生に今年はこの市町だということで、そこで自分の専門に即してまず研究テーマ、どういったものをやりたいかという問題意識を発表してもらい、そのテーマを市町の窓口の方にお送りをします。市町のほうで、それならこの職員に話を聞いたらいいか、この企業に話を聞いたらいいか、教育委員会等にご相談いただいで詳しい方に来ていただくとか、そういった形で現地で役場等でヒアリングをしたり、あるいは実際に施設や遺跡等を見学したりといったことを6月に行います。これが一番対象市町に協力をお願いすることです。

その後、院生は予備調査を踏まえて、あらためて自分が現地でどういう調査、研究をするかということ学内で発表しまして、実際に夏期休業中の期間を用いて、現地調査を実施をするということになります。その成果発表を9月、現地で合宿という形を行っております。必ずしも現地で合宿までする必要がないということもありますが、大学院生間の相互の交流の機会実はそれほど多くなく、かつ昼間と夜間の院生はなかなか交流する機会がないということもありまして、とりわけ社会人の人からしますと、合宿というのは魅力的なところがあるようで、卒業以来久しぶりに合宿をしたと言われることもありまして、そういう交流の機会としても位置付けて合宿というものを実施をしております。

それを受けまして、最終的に報告書というものをまとめるのですが、その準備が10月、11月ということになりまして、お手元に最新の桑名市と、その前年の多気町の研究冊子があると思いますけれども、こういった報告書をまとめているということと、それから報告書の概要版という形で、地域交流誌の『トリオ』というものがお手元にあると思いますけれども、その第2特集に概要版を載せております。それから、それを基に現地発表会のプ



レゼンテーション資料を作るというのが、この時期の作業になります。

これが『トリオ』です。お手元にあると思いますけども、第2特集は必ずこの「三重の文化と社会」の成果を掲載をしております。

これを受けまして、1月に現地発表会というものを行います。これは昨年度の桑名

市での発表会のポスターと現地の発表会の様子です。学内発表会というのはこの予行演習というのを兼ねまして学内でやりまして、そこでのコメントも踏まえて、あらためて現地で発表します。1人発表時間15分ほどで院生が発表して質疑応答するというので、現地で会場をお借りして市民の方々にも広くご参加いただきます。最近は毎回市長さん、町長さん等にもお越しいただいて、ごあいさつをいただくようにしております。

最後に、この科目の意義と成果を地域人材育成という観点から振り返ってみますと、1つは院生が自らの専門分野を生かして、地元三重の文化や社会的諸課題に光を当てていることです。院生の中ではもちろん、必ずしも修士論文のテーマと重ならないことも非常に多いわけですが、自分の専門を生かして地元三重のことを考えてみる、そういう機会になっているのではないかと思います。また、実は修士課程の院生というのは自分の研究成果を公表する機会というのはそれほどないわけですが、そういった意味では、この科目はそういう貴重な機会になっているのではないかと思います。

いま1つは、社会人院生の多くの方がこの科目を受講されています。ですから場合によっては、自治体職員の方が自分の属している自治体と違う地域の事例を調査したりする、そういう機会にもなっていくということです。

最後に、社会人ではなくて学生の場合も、この科目での研究テーマを生かして県内の公

## 地域交流誌『TRIO』

- 人文社会科学研究所の地域交流誌として、大学院改組以来毎年発行。
- 第2特集に「三重の文化と社会」の成果を掲載。



務員等に就職をしているということがあります。例えば鈴鹿市で行った際、院生が鈴鹿地域の高卒労働市場の変化というようなテーマをやって、実際に三重労働局に就職をしたり、あるいは鳥羽市で行った際、鳥羽藩領における鰯漁の特質と変容といったテーマを研究して、その後に市役所の文化課の学芸員として活躍されているといった例がありますし、ほかにも県内の公務員として就職されている例がたくさんあります。そういう意味では、この科目は地域人材の育成という点でも大きな成果を持っているのではないかと考えております。私からは以上です。

### 科目の意義・成果 —地域人材育成という観点から

- **社会人院生の多くが本科目を受講**  
自治体職員などが他地域の事例を調査・研究
- **科目での研究テーマを活かし、県内の公務員等として就職。**
- 「高卒労働市場の変化—鈴鹿地域を事例として」  
(2006年鈴鹿市) —三重労働局
- 「鳥羽藩領における鰯漁の特質と変容」(2013年鳥羽市) —松阪市役所文化課 (はにわ館学芸員)

## 第5章 質疑応答

【司会】 では、学部長の理念の説明から、教務委員長、学生支援委員長、そして「三重の文化と社会」の担当教員のほうから、人文学部・人文社会科学研究科における地域人材の育成ということで、取り組みを説明させていただきました。

時間の関係で分かりにくかったところもあるかと思いますが、ぜひ委員の皆さまのほうから質問をお寄せいただければと思いますが、どなたからでも結構ですので。鮎京委員、お願いします。

【鮎京委員】 詳しいことが分からないので、失礼な言い方になったらお許しいただきたいんですが、全体を通じてお話を聞いて、文化学科というのの位置付けが非常に分かりにくいような気が私にはいたしました。例えば日本研究とか4つの分野があって、日本研究の必修科目というのが今日ご説明があったんですが、これはこれで日本文化論全体を学ぶというのは分かるんだけど、じゃあほかの地域というのは非常に広範囲というか、曖昧模糊と言うと失礼ですけども範囲が広くて、そこで例えば学生が何を勉強するんだといったときのイメージが私には分かりづらかったわけです。

そこで、そういう問題はあるんですが、1つだけご質問しますと、文化学科の学生は外国へ留学どのくらいのパーセンテージで行っているのかということが私の質問でございます。



【司会】 学部長か教務委員長のほうで  
お答えを。

【安食学部長】 数字から言いますと、留学に行っている学生数は年間、正式な協定を結んでいる協定校に行っている学生が十数名だと思います。これは少しずつ増えております。ただ、協定校以外でも留学はありますので、合計するとどうでしょうか。

【鮎京委員】 つまり 420 名いる文化学科の学生で、短期であれ、長期であれ、とにかく留学に行ったという学生数というか、パーセンテージが知りたいということなんですが。

【安食学部長】 すみません。今言いましたのは文化学科ではなく、学部です。学部全体で言った場合に、協定校に十数名です。仮に非協定校も合わせて2倍だとすると、おおよ

その数字で言っていますが 30 名で、それはですからパーセントでいいますと、学生定員に関してはどれぐらいになりますか。おおよそですが、1割ぐらいでしょうか。

【鮎京委員】 本当に失礼な言い方になるとあれなんです、この文化学科って留学させて僕はなんぼのものだという気がするんです。こういう構成であるとしたら。つまり自分はアジアで中国1年行ってきたと、あるいは英語で1年行ってきたというのが売りになると思うんですが、その辺との兼ね合いで留学生派遣というところでどういうふうに大学、学部として考えられているのかなということを思ったものだから、発言させていただきました。

【司会】 では、ほかの委員の方から。  
どうぞ。

【東委員】 地域という言葉について、質問をさせていただきたいと思います。私も自己紹介のときに地域というのは、三重県だけの地域といますか、そういう地域ということで発言いたしました。



今ご説明を聞かせていただいたときに、世界の各地域を1つ選択するという、こういう地域の使い方と、地域人材という場合のこの地域人材の地域は、世界の各地域で活躍する人材なのか。この地域という言葉は2つ使われ方があるのかなと思いましたが、それぞれの使われる文脈によって使い分けておられますかということ、少し分かりにくかったので質問いたしました。

【安食学部長】 一言申しますと、今回のテーマとしました地域人材の育成という場合、地域というのは地元地域の意味で使っております、ローカルなといますか。文化学科は4地域制度ですと言う場合の地域というのは、より客観的なというか、世界を区分したときの各地域単位という、そういう意味ですので、ちょっとその辺り表現が不徹底だったかもしれませんが、ここでご意見いただきたいのは、地元の地域に役に立つというか、地元地域に貢献できるようなそういう取り組みに関しては私たちはこのように考えてきたという、そういう文脈で使っておりますので、ご理解いただきたいと思います。

【司会】 司会ですのであまり言わないほうがいいかもしれませんが、文化学科の場合は恐らくエリアスタディーという意味での地域だろうと思います。地域人材と言う場合には、この間政権も含めて地域振興というか、地域創生ということの中で、若い人を地域で就職

させて、そこで子どもも育てるという意味での地域ということで、若干そういう意味では違うのかもしれませんが、結び付いている点もあるのではないかと思います。ほか、いかがでしょうか。中井委員。

【中井委員】 ご説明ありがとうございます。服部先生と上井先生にお伺いする。別件ですが。まず服部先生のお話で、今も話がございましたが、地域社会が求める人材育成の強化、この意味は、私も地元としては分かる部分はあるんですが、先般頂いている 2012 年の 10 月 24 日の前回、前々回ですか、外部評価の報告書、こちらの 18 ページに私は目を留めさせてもらいました。そこには企業が求める人材能力というダイアグラムがございまして、コミュニケーション能力とか、大手さんですので、百五さん、三重銀行さん、第三さんとか三重電さん、JA さんとか、要するに企業が求めているこのレポートに基づいてどのようなカリキュラム、あるいはどういう方向性をお出ししたのかというのが質問の 1 点。これと、地域社会が求める人材育成の評価とどう連携するのかという点を教えていただければというのが服部先生への質問でございます。

上井先生には、先ほど全学のインターンシップではどの程度かという、これは人文学部ではございませんという、要するに全学のインターンシップですが、要するに 265 名おられて全学のインターンシップに何名の方、1 人でも 2 人でもいいんですけども、要するに何パーセントぐらいの方が人文学部では実際企業へのインターンシップに参加されているのかということと、その声のフォロー。学生さんのインターンシップというと、反省文じゃないけれども報告みたいになんかありますよね、コメントが。それを全学の就職支援で終わっているのか、ちゃんと人文学部としてはインターンシップに参加した人の声を人文学部として分かっているのか。その点についてちょっと教えていただければと思います。以上です。

【司会】 では、服部先生。

【服部委員長】 本日は、人文学部の来年度からの取り組みに関連するカリキュラムを中心に紹介させていただきました。2012 年度の 18 ページのところ、確かに赤い線とグリーン線とございます。大学で考えていることと実社会で企業の方々が期待されているところのギャップというのもあるかと思うのですが、この間三重大学全体の取り組みとしまして、生きる力とかコミュニケーションする力というのを 5 つの学部全体として伸ばすこととかなり力を入れておまして、そういうことでは基礎教育です。人文学部でもスタートアップセミナー、それから教養ワークショップというものに少人数で参加してござい



て、今までは文献を読んで、せいぜいそこで発表して終わりということなんですけども、それをディスカッションする形でお互いの考えを深め、お互いに刺激しあってという、教養レベルでそういうコミュニケーションの力を伸ばしていくとか、プレゼンをする力を伸ばすということに力を入れておりますので、1年生のところでそういうところはできるだけ入り口のところで強化するというふうな、大学全体としての取り組みでカバーしていきたいと思っております。

【中井委員】 ありがとうございます。どちらにしろ入り口はコミュニケーション能力になると思うんです、社会におきましても、企業におきましても。ですので、こういうのを参考に軸がずれないようにして地域社会が求める人材育成。お話の中に指導力という言葉が幾つか出ておりますので、その点も単なる首長とか課長じゃなくて、できるだけパワーのある学生を、オーラの発する学生を育てて。ちょっと私的な話で申し訳ないんですけど。ありがとうございます。

【服部委員長】 参考にさせていただいて、今後もカリキュラムの改革に取り組みたいと思います。ありがとうございます。

【司会】 上井先生。

【上井委員長】 インターンシップの参加者がどれぐらいかということなんですけど、恥ずかしい話なんですけど、インターンシップのほうについては、学生委員会のほうでは今現在扱っているのは全学のほうになってしまっているんで、今事務の方に人数のほうは調べていただいているんですけど、私のほうでははっきりしておりません。

【安食学部長】 先ほど説明がありましたように、インターンシップについては、各学部がというよりも全学的なキャリア支援センターで主に扱っております。人文学部は現在およそ 90 名インターンシップに参加しております。ほとんどが3年生です。ですから単純に言いますと、1学年で 265 人ですから、そのうち 90 人ぐらいということです。ここ 2～3年でかなり増えました。

それからフィードバックうんぬんについては、その資料はあるようです。あるんですけど、全学の支援センターが多分それを蓄積していて、学部のほうにそれがなかなか来ないといえますか、そういう現状です。

【中井委員】 ありがとうございます。どちらにしろ、パーセンテージが低いとお互いに情報を共有しようとなるでしょうけど、これだけ就職率のパーセンテージが高いとそこそこいろいろなことが功を奏しているなということで、比較的その内容については分析して

いない部分もあるかもしれないので、その点ちょっと教えてもらいたかったということです。ありがとうございます。

【司会】 松田委員、お願いします。

【松田委員】 私は企業の立場からということで質問させていただきます。三重大学はとも地域に密着しているところと、地域人材の育成、特に少人数教育、また、フィールドワークというところに特徴がある、ここに非常に惹きつけられています。学生さんには、学生の間にもいろんなことを経験し、感じてもらい、将来何かがあったときにも対応できる能力を育ててほしい。もちろん企業に入ってからでも伸ばすことではあります、その経験を学生の間にも多く積んでいただけたらと思っています。



そこで、少人数教育、そして定めたテーマでフィールドワークを行っている2年次、3年次において研究する時に、希望通りにテーマを選べるのか、そうでない場合もあるのか、そのような場合にはどういうフォローをするのか、を教えてくださいたいと思います。また、テーマについても深く1年、2年研究されるのか、そうではなくて違うこと、あまり興味がないところに飛び込ませるようなことがあるのか、お聞きしたいと思います。

【司会】 これは学科ごとに。学科長のほうから。

【松田委員】 評価の質問としては逸れているかもしれませんが。

【司会】 遠山先生、お願いします。

【遠山学科長】 私の文化学科のほうで申しますと、先ほど地域にまず分けて、それからそれぞれの指導教員に分かれるということですが、私が見ている限りは原則的に学生がやりたいと、学生のニーズというものは基本的に外すことはないということだと思います。まして無理やりこれをやれとか、そういうことはしていないということだと。

【豊福学科長】 法律経済学科のほうでは、少人数ということで、ゼミの人数の上限は12名になりますので、まれにあふれることがございます。その場合は2次募集という形で空きがあるゼミにまた希望を出してもらって調整をしているという形になります。

【松田委員】 学生の中に1つのテーマではなく、たくさんいろいろやってみようという

ようなことはあるのでしょうか。

【豊福学科長】 法律経済学科の演習の場合には、どちらかという卒業研究のテーマは4年生でやりますけれども、3年生の間はむしろゼミ独自のテーマで、ゼミ生合同の調査研究をしたりすることが結構多いかなと思います。その後、4年生の卒業論文ではまた違うテーマをやることが多いように思います。



## 第6章 外部評価員の評価

【司会】 これからは外部評価の委員の先生のほうから 10 分をめどに評価をいただきたいと思います。どなたからでもよろしいんですけども、どういうふうにいたしましょうか。

【中井委員】 皆さん、お疲れさまです。ありがとうございます。着座のままで。外部評価というものにふさわしいかどうかで



ございますが、お話し申し上げます。私は企業の間でございまして、1つ大学というのは夢があって未来があるということが非常に大事だということは存じ上げているつもりでございまして、当然未来を築くためには過去があって、その過去の分析の中に定量的なものや定性的なものを評価していただければ。

というのは、2012年のものと2010年、両方とも拝見しまして、大変質の高いというのは十分、せんえつですけど理解させていただいております。ただ、数字というのはほとんどないんですね。プロダクツという部分じゃないんですけども、人材の育成であれば、こういう企業へ入りたい学生が無事に入ったという、それはいいんですけど、去年は20名だったけど25名になったとか、今回も地域人材であれば、当然いずれは卒業生の30%とかそういうことを目指しておられるわけですから、数字が出てまいりますよね。

ですので、僕からお話し申し上げたのは、1つ桑名の豊福先生のお話でも実は大学ではこれでいいと思うんです。この調査に何人かおられますよね。調査にあがった学生さんとか手足となった方とか、発表者以外にも実際にはおられますよね。そうすると、このリポートの頭で近世輪中地域の新田の開発と洪水対策で、指導教員と報告者が書いてございまして、われわれからすると、いつからいつの間に何人の方がこの調査に携わったのかというのが添え書きでもあればありがたいし、数字が、最後のページに実は、これに参加した後藤という先生が発行ということになってはいますけれども、もしできるならば調査した学生の名前を全部羅列していただければ、その学生はこれを持って桑名市を受けに行けると。それと学生さん、調査員にとってはとてもいい思い出になるという。活字化されるというのは非常に大事なことで、1つの学生さんの歴史をつくるわけなので。

そうすると、数値的な記録あるいは目標とかが非常に大事になるので、当然質も上げなきゃいけないんですけども、まして1人の人が俺は20回現地へ行ったというのと1回しか行っていないというのを、そんなのも一緒に名前を挙げられたら嫌だという、そういう問題じゃなくて、学生として参加してこれが一緒にできたよと。

大学側からすると、研究レポートであれば発表者だけの話でいいのかもしれませんが、そういう点で一生懸命、地域人材をつくろうという中でいったときに、地域人材をつくろうという中で、地域の文化を勉強しようという方々は当時こういうメンバーだったよ、俺たちやったよなど、あんなのあったよねと、今まだ僕あれ持っているんだよと、そういう部分を学生にあえて意識付けしていただければ、本人の認識が深まるというんですか、多少。また卒論は別です。卒論はまた別だと思うんですけど、何となくそういうのをしていたきたいというのと。

やはり親が、保護者さんが子どもが何をしているか分からないんですけど、親に見せろと。これは多分、学生に全員には豊福先生、配布されたんでしょうか。

【豊福学科長】 これは大学院生の報告書なので。

【中井委員】 冊子にはなっていないんですか。

【豊福学科長】 私の学生の論文は入っていないです。

【中井委員】 さようですか。院生の人は親にこれを見せたんですか。

【豊福学科長】 さあ、それはどうでしょう。

【中井委員】 要するに、保護者とも一体にならないと、本人たちの理解が違うところへ行ったら就職活動もうまくいかないよというのと、親からすると何しているのか分からないけどこんなことをしたねと、うちの子何かしているわねという、少しでも親御さんの理解をいただくと。

要するに学生さん、院生さんが納得してこれを作って、保護者も理解して、そして企業へも出せるようなものがあれば、そこは1ついいプレゼンになるんじゃないのかな。そういうものを幾つ院生の方は持っていますかとか、そういうような形で、地域のどの程度のところを知っているのかというのを。

数字はどういう数字がいいのかというのはありますけど、質は完全に定性的なものは把握されているんですけども、こういう地域社会の勉強に265名のうち何人が参加したというのも、これは1つの定量的な課題ですよ。わずか5人だったのか15人だったのか、いやいや中井さん、3分の1が実は地域研究のテーマで人文学部では動いているんですよ

とか、そういうような形で、要するに学生の数がどの程度地域へ踏み込まれたのかと、あるいはフィールドへ入られたのかと。

そして、なおかつ先生方が 65 名お見えの方の中で 20 名の方が実は地域連携の業務を、あるいは共同研究を、あるいは地域のため論文の素材をしているんですよと、単なる学生の講義だけじゃなくて、実際に現場へフィールドへ連れていっているんですよというようなことも、この前段にあるいは最後でも、あるいは来年でもですけど、数字も挙げていただいたほうが、人文学部全体としてどういう形で地域連携に取り組んでいるのかというのが、外部評価委員としては多分見やすい部分だし、それをもって評価。過去がなければ多いとも少ないとも言えないんですけど、次々回、その次ぐらいは、いやいや全員やっているよと言えばそれは立派ですねということになりますし、それがまた学生さんの就職への道にもなるというような形となるというか。

問題は、質は非常に高く結構なんですけど、そういった点では少し定性的だけじゃなくて、定量的なお考えもいただければと。

それともう 1 つは、魅力的な人材づくりですよ、実際は。ですから、画一的な教育の中でどうやって魅力的な人材づくりをするかといったときに、地域の課題なんかというのは結構ばらつきがありまして、面白い課題かと思うんです。ですので、そういった魅力的な人材づくりで、個性を大事にしながら知の集積を行うという本来大学の機能ですので、その魅力的な人材が逆境というか環境を切り開いていくというようにつながると思いますので、そういった点でも少し先生方もテーマを追い掛けるより人づくりという意味での教育、服部先生がおっしゃったような形でうまく取り上げないと、手段と目的を取り違えてしまう可能性があるんで、目的は魅力ある人材づくりなので、よろしく願いしたい。あるいは、そういうところをどうするかが 1 つの課題ではないかということ。

それと、三重県における三重大の位置付けはある程度確固たるものがあると思うんですが、ちょっと私が言ったらほかの人が言いにくくなるかもしれませんが、さっきもお話があったんですが、OB 会とかちゃんとしたものを組織して、同窓会を、三重県内のネットワークをきちんと張り巡らせて、三重大の位置を確固たるものにしながら、本当の地域の課題は何なのかという情報を入手して動いていただいたほうが、もっと地元での賛同も得られるし、三重大の三重県への定着が図れるのではないかということを思います。人文学部だけじゃございませんので、法学部も教育学部も医学部も皆あるかと思えますけど、……もごさいますが、やっぱり同窓会を利用した研究テーマの発掘とか、もう 1 回大

学院に行ってみたいわという人を求めるというのも1つのテーマですので。

外部評価としましては、そういうようなところまでウイングを広げた上で敷居の低い、入りやすい、話のしやすい、相談しやすい、なおかつ知の集積レベルである三重大学ということで、ちょっと欲深いですけど、せっかくお招きいただいて、高い席ですけど、言わせていただきました。

一応私の外部評価的なものは、大変質は結構ですが量をどうかよろしくと。そして、その量を増やすには同窓会組織とかネットワーク、あるいは魅力ある人材づくりをしていただければと思います。以上です。

【司会】 ありがとうございます。では続いて、松田委員のほうからお願いできますか。

【松田委員】 三重交通グループホールディングスの松田でございます。本日は大学教育について考える機会をいただきまして、ありがとうございます。教育改革に積極的に取り組まれ、また、学生に対する支援体制の充実に努力されていることにつきまして、私が経験していた学生時代とは全く違って、素晴らしいものだと思います。

その中で、3つ私が感じたことを申し上げたいと思います。1つは、頂いた資料の中でアンケートがたくさんありましたが、それに対する改革をされ、また、今日伺ったお話では新たに来年から違う形で進められるということです。こういうことも「終わり」ではなく、常にPDCAサイクルを回して、よりよい体制づくりに努めていただきたいというのが1点目でございます。

それから2点目は、先ほども少し質問させていただきましたが、複数の地域で、また異なるテーマで学習する機会を与えるカリキュラムもあればありがたいと思います。

私は伊賀で生まれ、社会人になってからは仕事の都合で四日市、伊勢、今は津に住んでおりまして、それぞれの町に愛着があります。仕事の上でもそれぞれの町に関わることがあり、例えば湯の山や伊勢志摩の観光について考えたり、最近では電車やバスのダイヤに関係したりしていますが、やはり、その町に触れたことがあるとモチベーションのアップ、やりがい生まれてきます。そういう意味で、教育の中でいろんな機会が与えられたら良いと思います。

それから3点目は、学生支援において、変化に対応できる柔軟でポジティブな考え方を育ててほしいと思います。学生にとって、就職は一つのゴールではありますが、また新たなスタートです。就職試験に立ち会ったこともあります。世間で言われるように学生が均一化してきていることも感じます。それぞれ個性があるのですが、試験のときは同じよ

うに振る舞われがちです。企業が必要としている人材は違うと思います。

また、企業が必要とする人材も変わっていきます。今、入っていただく方が将来活躍される時代にどういう人材が必要なのか、正直わかりませんし、環境が変わっても柔軟に対応できる、その中で自分を生かしていけるような人が欲しいのです。そこで大学の中でもいろいろなテーマに触れて研究できる環境を作っていただければと思います。

学力が大事なことは言うまでもありませんが、そのうえで、傾聴し、説得する力、また一方で、納得して自分が変われる柔軟性も必要だと思います。大学ではゼミや討論、グループ研究などの中で、そのような経験ができると思いますし、機会を多くもっていただければと思います。

就職試験のときに学生さんからこのような話を伺えればうれしいです。以上でございます。

【司会】 ありがとうございます。東委員から。

【東委員】 ありがとうございます。さまざまな視点からといいますか、あちこちへ行ったりしてまとまりのない話になるかと思いますが、よろしく願います。外部評価という言葉に堪えられないと思いますが。

今、高大接続システム改革ということで、人によっては明治以来最大とか 100 年に 1 度とかいう言い方をされますが、その中にももちろん高等学校教育の改革もあって、大学の教育もというようなことだと思います。これを小・中・高・大とつないでいくものとして、学力 3 要素というようなことが言われていまして、何を申し上げたいかといいますと、三重大学人文学部を卒業すると特にこういう力が身に付きますというところをもっと前面に出していただくといいのかなと思いました。

大学ですのでいろいろな力ということがあるんでしょうけども、できれば具体的に、他の大学にはない、他の学部では育成されることのないということとは言えないと思いますけども、人文学部を出ると 4 年間で特にこういう力が伸びるんだというところを、ということが 1 つ思いました。

それから高校教育、高校現場の視点からいきますと、2 つ目ですが、今キャリア教育という言い方がかなりもうたちましたんですけども言われて、高校生たちはこんなふうな指導を受けて高校を卒業します。すなわち、あなたは大学へ進学したいのかと、大学を卒業するとどんな職業生活に就きたいんだと、そこから逆算して考えていこうねと。オーソドックスな指導の仕方なんです。そうすると、具体的にこういう職業に就きたいと思う高校



生を増やしていこうとしているわけです、われわれは。そうしますと、人文学部卒業後の職業生活を見据えて自分探しの旅といいますか、自分は一体何が向いているんだろう、何がしたいんだろうという、そういう学生像ではなくてはっきりしていると、こういう職業に就きたいんだ、従って、この人文学部へ行きたいんだというふうにはなかなかかなりにくいんだろうと思ったんです。

学際的、国際的ということ、総合的ということをおっしゃいましたが、学部長先生が、しかしそれを逆手に取るといいますか、われわれもどうしても自分の学生時代を思い起こしてしまうんですが、知的な自分探しの旅ができる、そういう大学もあってもいいと思ったりします。むしろあり続けてほしいなと個人的には思っているんですけども。すなわちそういうふうを考えていきますと、どんな問題や課題でも対応できる人間、マルチな人間、そしてそれを仲間と共に解決できるという、そういう自信にあふれた学生、ぜひ身に付けていただきたいな。いろいろな経験を積み、知的な経験を積み、いろいろな職業生活において課題が生じて、問題が生じて、チームワーク、チームプレーで解決していけるんだという、そういう自信にあふれた学生さんをぜひ卒業させていただくといいのかなと。

そうでないと、積み上げ式にある専門領域を積み上げて4年間だと、資格なりあるいは専門的職業人なりという、そういうことではないんだと理解いたしました。それはむしろ専門的職業人という言葉がマスターコースのところに出てきましたので、学部ではそうやって書かれていない。なるほどなと思いました。そうすると、専門性ではないんだと。どんな課題でも対応できる、そういう共通の力といいますか、ユニバーサルな力といいますか、そんなものを特化して鍛え上げていただくという。思考力、表現力、判断力ということになるかも分かりませんが、それを具体的にこんなことを学んで卒業するんですということをクリアに示していただくといいのかな、こういうふうに思いました。

もう1つは、私どもは今、上野高校ですが、こんなふうなことを高校生に言います。校歌にもあるんですが、最後の歌詞にこの地域を出ていきなさいと。「吾等の望み山々を越えて溢れて外に出ん」という歌詞があります。グローバルに考えて出ていきなさいと。しかし、その後必ず付け加えます。この伊賀の地域を忘れるなと。忘れるなだけではなくて、地域の発展に貢献する、そういう人材になって戻ってこいと、そんな言い方をしている。

地域ということが1つのキーワードになっている学部だと理解いたしました。そこを地域ということをもっと、エリアということじゃなくて、私が申し上げているのはローカルな意味での、グローバルに考えアクションを起こすんですけども、最終的にはローカルに戻



ってくる。

それを支えるのは恐らく、私はローカルプライドという言い方をします、高校生たちに言うときは。伊賀の地域のいろいろなプライドがあるだろうと。あるだろうといいますが、それを身に付けようねと。学習しようねという新たな学習も始めておりますけども。地域貢献に十分、外でいろいろな経験を積んだその成果を地域の発展に生かすんだという、そういうマインドを持った高校生ということを行っていますけども、できればそういう総合性、学際的な人文学部さんのほうで……の経験を積んで、さらに海外でも、最終的にはこの三重県へと、こんなふうに思っていたかといいのかなということをおもいました。以上でございます。

【司会】 ありがとうございます。それでは、鮎京委員からお願いします。

【鮎京委員】 簡単に述べさせていただきます。三重大学全般、あるいは人文学部全般についての私の印象でありますけれども、以前こちらの学部で非常勤講師もさせていただいていたということもあって、気持ちの上では大変親しいものを持っております。

2つ私の印象が最近あって、1つは広報誌が素晴らしいと。今日も頂いたこの小冊子がありますけども、この内容も非常に充実しているし、編集力も相当なものだなということに思っております。もう1つはその内容とも連動するんですが、三重の各地の地域との連携を三重大学の人文学部は非常に意識的に、積極的にやっておられる。例えば忍者学というような、初め見てびっくり仰天したんですが、進取の気性というか、そういうものも感じております。

しかも、来ている学生も、私は非常に水準の高い学生がここには来ているというふうに思います。その結果として、今日ご報告があったように就職状況もほとんど100%に近い、かなりいいところへみんな学生も就職ができているというような、総論的にはそういう印象を持っております。

そこで、にもかかわらず幾つかの感じたことを申しますと、1つは就職状況のところでは何で100%に全体でならないかという、やはり文化学科の学生の就職率が若干低い。低いと言うと失礼ですけども、数字の上からそういうふうになっているわけですね。

ここから先は私の想像なんですけど、さっき意見で申し上げたように、単なる文化学科という言い方はおかしいかもしれませんが、何らかの筋となる知識なりを持っているというふうに恐らく自分で評価できないのか、あるいは外部からが評価できないのか分かりませんが、何らかの理由でこうしたためらいというか、就職ができないという状

況があるのではないかという感じがします。そういう意味では、一方が 100%に対して 96 という数字を、4%のことではあるけどどういうふうに高めていくかということについて、ぜひ教職員の方々に考えていただきたいなという感じがいたします。

それから 2 番目でございますが、今日は地域人材の育成ということが 1 つの大きいテーマでございました。実際は中部経済連合会、中経連というのがあって、この地域のそういう団体であります。中経連さん、この 2 年ぐらいにわたって大学と産業界との地域連携ということがテーマになって、非常にきめ細かく会合をされています。ということは、企業の側の方々も大学の地域力といいますか、地域人材の育成ということに非常に本腰を入れてきているという感じがいたします。

そこで、この場合、地域とは何かという話がありましたが、今日の例えば 21 ページを見ますと、三重県、愛知県、東海地方、つまり約 3 分の 2 は中部圏に三重大学の人文学部の出身者は就職はしていると。これをどう見るかということは、三重の経済界の方々のお考えもあるでしょうし、そういうところからのいろいろな意見を頂かなければいけないんですが、ただ客観的には近畿というのも身近というふうに考えると、圧倒的な卒業生の多数が地元で貢献しているということは私は言えるのではないかと思います。

3 番目ですが、そこで論点としては、大学は果たして地域に貢献できるかという、こういう問題を立てる必要があります。大学が地域に貢献できるかというのは、これは私の個人的な印象ではありますが、むしろそれは上からの目線であって、そうではなくて、地域から大学およびその教員も含めて、特に学生は地域のエネルギーをどうもらうことができるのかというふうに問題を立ててみたらどうかという気がいたします。

どういうことかという、これは詳しくお話しする余裕はありませんが、私は初め申し上げましたように、愛知県の県立大学と県立芸術大学というのを担当しておいて、特に常滑であるとか、岡崎であるとか、愛知県の商工会議所さんとの連携に非常に力を入れて連携を行っています。そういう中でいろいろな結び付きができて、例えば県大の学生が愛知県とか岐阜県とか三重の中小企業さんを訪れて、そこで話を聞きながら、例えばロシア語、英語、フランス語、ドイツ語、中国語という形で企業紹介のパンフレットを作る。それも 1 つの文章を各国語に直すのではなくて、例えばこの商品が中国のどういう層の人をターゲットにしたら売れるのかという視点で、それぞれの国に応じてそういうものを作るというようなことをやっておいて、企業さんに非常に喜ばれているというのが去年から始まった実は新しいプロジェクトとしてあります。

あるいは、芸術大学の分野ではエマージングコンサートという名目で、新聞にも最近少し紹介されたんですが、若い演奏家、つまり大学を出た演奏家が社会に出て、自分たちが演奏家として独り立ちしてやっていけるというのはどういうことかということを、例の宗次さんという CoCo 壺番の宗次ホールというのがございますよね。あそこの支配人のプロの方にいろいろ教を受けて、例えば名刺を持っているとか、あるいはコンサート用の写真をきちんと持っているか、あるいはどういうふうにしてお客さんの関心に応じて曲目を作り上げていくかというような、非常にいろいろなことを教えてもらっているということがあります。

あまり長くなってもいかなのでやめますけれども、従って、大学は地域からいろいろなエネルギーを私はもらうことができるし、そうした学生が地域あるいは産業界、あるいは自治体とかかわって、よく私は最近言うんですが、学生の魂が揺さぶられるような経験なり体験をすること、このことが将来の魅力ある人材づくりにとって決定的に大事だという、そういうことでございまして、ぜひ三重大大学の先生方も一緒に頑張っていただければと思います。ありがとうございます。

【司会】 ありがとうございます。外部評価委員の先生方から貴重なご意見を頂きました。ありがとうございます。時間も少しありますので、意見交換ということで進めてまいりたいと思います。今頂きましたご意見などについて、学部のほうからあらためてお聞きしたいこととか、教えていただきたいこと等ございましたらお願いします。

【安食学部長】 ちょっと補足といいますか、今ご覧いただいていますのはディプロマ・ポリシーで先ほど私が説明しましたが、昔の感覚でいいますと、こういうことを言ったらあまり良くないんでしょうけど、大学の先生というのは1人1人が親方みたいなもので、講義をやるのも職人の技みたいだという、そういう感じもあったかと思います。

ただ、今はそうとも言っていないというのもありまして、例えばですがディプロマ・ポリシーで文化学科6項目、法律経済学科は5項目あります。私たちが担当している全ての授業はどこにつながるんでしょうかという一覧表を実は少し前に作りました。昔だったら多分あり得なかったと思うんですが、1人1人の授業は結局どういう人を育てているのですかという、自分の授業が例えばポリシーの1番二重丸、2番丸、3番三角とか、そういうのをまとめたこともあります。それはそれで自分たちがまず意識するという点では大事かと思うんです。

何を言いたいかといいますと、先ほどから話に出てきましたのは、企業の立場からする

とこういう力を身に付けてほしいということで、いわゆる大学の私たちが責任を持つ教育カリキュラムは、それとはまた別の観点かなというところもあります。私たちのイメージとは少し別のところでこういう力も大事ですねという、理解はできるんですが、正直なかなかさてどうしようか、難しいところがあるという気がします。

既に幾つか言われておりますが、例えば知的な自分探しでありますとか、魂が揺さぶられるようなうんぬんというご発言もありました。それは理解できるんですが、多分それは教員が何か教えるというものではないんじゃないかと思います。大学という組織、大学という場といいますか、全体として何かどういうふうに使われるか、うまくいけばそれが社会に出て重要な力、チームワークであるとか協調性であるとか、そういうところに結び付いていけば理想的ではあるかと思うんですが、正直言いますと、今の学部のカリキュラムでどこまで対応できるかというのがなかなか難しいかなと。それは大学全体として何かそういうところを考える必要があるのではないかと、正直なところそのように思いました。

それから、文化学科の就職率がやや低いというご指摘がありました。どうでしょうか。

【上井委員長】 これは 2015 年度のたまたま 100%であって、今までがずっと 100%だったというわけではなくて、統計的には文化学科のほうが上で法律経済学科のほうが下だ



ったというようにときもあるのかなと思いますけれども、たまたまこれは 2015 年度の数字なんです。

【遠山学科長】 必ずしも、いつも文化が低いとは言えない。

【上井委員長】 これはたまたま 2015 年度はこういうふうになったというようなこと。ただ、90%というところを1つのラインとすると、文化学科も法律経済学科も今までずっと90%以上を維持してきたので、全国的な就職率というところと比べると、高い水準に文化学科も法律経済学科もあるのではないかというふうに思います。

【藤田副学部長】 人文学部に来る学生の目的といいますか、それは1つは文系であるということですね。高校で理系か文系か分かれる。文系で地元の国立大学に行きたい、あるいはある程度のレベルで安く学びたいという場合に選ばれるのが人文学部。教育学部というのは教員になるための資格を取るための学部でありますから、これは違う。じゃあ人文

学部で法律経済を選びますか、文化学科を選びますかというときに、つまり会社に就職する、あるいは公務員になるぞと、就職ということをよく考えて大学へ入る学生は法律経済学科のほうをまず選ぶわけですね。

ですから、法律経済のほうが概して就職率は高いですし、男子学生も多いということになります。文化学科のほうは就職よりも自分のやりたいことを勉強したいというような形の学生、そういうふうを考えて入る学生が多いように思います。女子の割合が非常に高いわけですね。

ですから、もともと入った時点で、つまり同じような能力というか同じような関心を持っているんだけど、先のことを考えて入っているかどうかの違いというのが微妙に反映して、文化学科はやや低い、あるいはいろいろ考えてなかなか先に進めないような学生が文化学科のほうに多いのかなという、これが正直な考えです。

**【司会】** 麻野先生、どうぞ。

**【麻野】** 委員の方から、多角的な視点から、いろいろなテーマを分析する力を身に付けてほしいというご意見を頂きまして、来年度から始まりますカリキュラムの中で今回、服部先生が時間の都合上ご紹介されなかった専門 PBL につきまして少し説明させていただきます。

法律経済学科の専門 PBL では、一つのテーマ、例えば地域福祉といったテーマを決めて、そのテーマについて、経済的な視点から、政治的な視点から、法律的な視点から、具体的な事例を分析するという作業を、グループで取り組ませるということを考えております。

文化学科もそうですが、専門的なテーマ、日本文化なら日本文化、あるいは社会福祉なら社会福祉というようなテーマについて、いろいろな学問分野から切り込んでいけるというのが人文学部の特長であると思っております。今回、そうした多角的分析を、専門 PBL という形で、早い段階で学生に経験させよう、かつ、グループで取り組むことでコミュニケーション能力を鍛え上げようと考えております。これが来年度の改革の1つの目玉でありまして、ご指摘いただいたことに少しは応えられるようになっていけるのかなと思っております。

**【東委員】** 専門 PBL というふうにおっしゃって、すごくそれを期待させていただきたいと思っております。われわれ学校現場においても、多様な問題が学校で発生します。そのときにいわゆるティーチャーだけで当然考えられない。解決できない。外部のいろいろな



専門スタッフを招き入れて、文科省がチーム学校という言い方をしています、そういういろいろな専門性を持った方々によってたかって問題を解決していくんだと、こういうふう

にやっぺいこう。  
それを既に大学の学校教育のほうでされようとしている。非常に期待させていただきたいし、しかし共通部分は、恐らく学問ですので、学問的に共通部分がきつとあるんだらうと。コンピューターで言ったら OS の部分といいますか、アプリケーションソフトじゃないんですと、OS の部分は一緒でしょうということだと思っんです。そういうところを鍛え上げていただくといいのかなというふうに思っんです。多様で、しかし根っこで持っているものはどんな問題でも解決できるという、そんな社会人をぜひ輩出していただきたいなと思っんです。ありがとうございました。

【司会】 ほか、いかがでしょうか。服部先生、何か教務委員長として。いろいろな先生、いかがでしょうか。豊福先生も。

【豊福学科長】 一言だけ。学生が地域からどういふことを学び取ることができるかが問題だと思っんです。ただ、やはり今どこの大学でも、学生を地域に放り込むということはやっぺいしているところであります。学生が地域に入ったときにどういふことを感じ取ることができるか、何を問題意識として持てるかというためには、やはり事前にきちんと学ばなければいけないというふうに考えていまして、そこをどれだけできるかというところで、人文学部としてはきちんと勝負をしなければいけない。学生を放り込めばいいという問題でもない。逆にそれは地域に対して非常に失礼だというふうには私に考えています。ですので、そういう意味でのフィードバックと、大学の中での学びといっんですか、それをきちんと大事にした上で地域の中で学んでいくということを取り組んでいきたいなと考えています。以上です。

【司会】 全部当てるようでは申し訳ないんですけど、田中先生、何か広報委員として。

【田中】 ないです。

【司会】 山田先生は何もないですか。名島先生もよろしいですか。

こういう地域人材ということでは言っますと、やっぺいり大学側の、学部側のカリキュラムということもあると思っんですけども、具体的な話としては連携の形をどうするかということが1つあるようにも思っんですけども、そういう点で、例えば鮎京委員のほうからはいろいろ具体的に商工会議所との連携などというお話が出ましたが、それはどんな形で進めておられるんでしょうか。



【鮎京委員】 さっき言ったような、具体的な例としてはそういうことなのですが、私は産業界との連携の形ということは1つのテーマではあるんですが、それとは別にとても気になっているのは、気になっているというのは、別に三重大大学だけのことではなくて私どもの大学もそうなんだけど、いわゆる外部資金であるとか競争的資金とか、さらには社会からの基金なり寄付という形のものがあるかというように獲得できるかということは、とても当座重要な問題であって、金の問題なんてというふうに思う方も多いかもかもしれませんけれども、ある意味そういう形で来るお金というのは、社会がその大学に対してどういう期待を持っているかという問題と割と重なってくるというふうに私は思うんです。

そういう意味では、この人文学部の場合がそういう競争的資金とか外部資金どういうふうになっているのかなということはちょっと気になって、ただ今日ご報告がなかったので言わなかったんですけども、そんなことをございます。

【司会】 あと少し時間がありますので、1つだけ各委員にもし可能であればということで教えていただきたいと思います。大学ですと専門の軸とか学問とか、専門を学ばせるという面と、松田委員や東委員から言っていたように、変化に対応できる基盤的な、知的な能力の育成を求められている面があって、その関係というものをどういうふうに考えたらいいだろうかと思っております。文化学科もそうですが、私の所属する法律経済学科に限っていいますと、もともと社会科学科ということだったので専門の軸の無いカリキュラムになっていました。ただ、あまり軸がないというのは何もないということにつながりかねないという面があって、それで法律経済学科ということにして軸を作りました。そうした専門の軸と、経済産業省的に言えばジェネリックスキルでしょうし、もうちょっと違った言い方をすれば、いろいろな変化に対応できる人間的な知的能力の育成とをどう結び付ければよいかということをしていろいろ学部としても現在模索中で、地域が1つその素材になっているんだろうというふうに考えております。それは松田委員も言っておられたように、すぐ答えが出なくて、いろいろこういう機会を持ちながら、試行錯誤する中で何かできていくのかなという感じはしております。その点、何かありましたらぜひ。

【松田委員】 私が企業の立場からということもあって、性格ということを強調しすぎたかもしれません。もちろん大学の本来の目的は、専門教育を充実して知識を向上させることだと思っております。

私自身も大学4年間の教育を受け卒論を提出しました。残念ながらその知識は社会人に

なってからほとんど生かせていませんが、4年間の新しい多くの経験で少しは違った方向からも考えることができるようになったのではないかと思います。学生を育てていただくにあたっていろんな経験をさせるカリキュラムであってほしいということでございます。

【中井委員】 同じ企業としての発言になるかと思いますが、企業にお入りいただいた方の人生については企業が責任を持つということですね。私どもの場合も小さな地方の都市ガス会社ですが、東京ガスへ入れる人がうちへ来るかというと来ないんですけども、極論を言えば、でもうちへお入りいただいた方と東京ガスに今年お入りいただいた方は明らかに差がありますけど、その差がなるべく開かないようにしてあげようと、そういう努力は小さい会社ですがさせていただいています。

そういうことでいくと、あきらめないとか粘り強くとか、そういうところが、当然ベースとしてはコミュニケーションとかチームワークとかそういうのは大事ですけども、当然身を持っていて魂も入っている方がいればありがたいんですけども、企業としてなかなかそういう方が私ども中小企業の場合はお見えにならないので、そこに身を入れてあげる、魂を入れてあげる、そしてあきらめないで自分の人生を地域でも豊かに歩めるようにするのが私どもの企業の立場であると、そう思っておりますので、要は地頭が三重大生の方はいいので、軽率じゃなくてしっかり地に足を付けられるように、私どもが自分で食べていけるように、企業としてもきちんと一緒に仲間として歩ませていただければと思っておりますので、そんなに心配しなくても学生の方はお力がありますし、自分で活路を開けるはずなんです。逆に企業のほうがその方の活路の少し支障となっているケースもありますので、そのコミュニケーション力が非常に大事なんです。

そういう面での自分の主張をできる、自主的な考えができる、あるいは自律的な考え方を持っている、自発的であると、そういうような学生さんをできるだけ育てていただければ、これを持っていたら企業は幾ら賞与が増えるとかそんな話ではございませんので、人間としてのそういう部分を少なくとも学問の……という、本来はそれがあって学問なんですよけども、私どもはお預かりした学生さん、あるいは採用させていただいた方の人生に責任を持たなきゃいかんと当然企業としては思っております。その中でうちを理解していただければと思っておりますし、全然違うセクションにお移りいただくかもしれませんが、それでもあきらめないでやっていただきたいと。全てが役に立つ、立たないではなくて、どこかで役に立っているはずですのでという思いはあります。

失礼ですが、高い席で生意気なことを申しました。一企業としてはそう考えます。

【司会】 ありがとうございます。要するに、前向きで意欲のある青年を育ててほしいという期待だろうというふうに思いました。それでは今日、いろいろ有意義な評価をきっかけとして意見交換もできたと思いますが、時間もまいっておりますので、学部長の安食のほうから閉会のあいさつをさせていただきたいと思います。

【安食学部長】 1点補足させてもらいますと、先ほど外部資金の話がありました。人文学部の現状で申しますと、圧倒的に科研費です。それにかなり頼らざるを得ないといえますか、いわゆる共同研究、受託研究の形というのは実績はあまりありません。企業との共同研究でも年間1つ、2つあるかどうかというぐらいで、あと自治体との市とか町とかの共同研究が年間2～3件という、その程度で、それはちょっと考えなくちゃいけないところはあるんですが、現状としてはそういうところです。

それとさっき私がうまく答えられなかった部分について、補足がありますか。留学生とインターンシップについてどうでしょうか。

【田中学務係長】 平成27年度中にうちの人文学部の学生が留学していた数ですが、これは全部で18名で、文化学科が13名で法律経済学科が5名ということになっております。

【安食学部長】 それは協定校ですよ。

【田中学務係長】 協定校です。協定校以外については、ちょっと全てこちらのほうでは把握しておりません。

それと27年度にインターンシップに行った数は、全学で359名、人文学部は96名ということで、これについて実習の報告書というのを出させておるんですが、その公開というのは現在検討はしておるんですが、今公開するまでには至っていないということです。

【安食学部長】 留学の数は協定校相手ですので、そのほかにもかなり実数としてはあります。ちょっとそこまではすぐ把握できなかったということですが、それでご了承ください。

それではそろそろ時間ということで、4名の外部評価委員の皆さま、本当に今日はどうもありがとうございます。うまく答えられないというところが多々ありまして、一言で言うと今後の課題となるのでしようが、やはりある種のジレンマかもしれないですけど、私たちは自分の専門性に立脚して学生の教育をやっています。毎日そう考えています。ただ、一方で、求められるものはほかのものもいろいろあるというところを改めて認識することができました。それは非常に重い宿題だろうと思いますけども、今日のこの場で認識できたことを少しでも前に進めていくというか、そういう方向でまた考えていきたいと思

っております。

もう1点申しますと、今回は地元地域重視のという、そういう観点でご意見いただきましたけれども、それは1つのとらえ方でありますので、例えばより国際ナショナルに国際交流はどうですとか、そういう視点からのとらえ方もまたあろうかと思えます。ローカルとグローバルというのは私は矛盾しないと思っているんですけども、ですから今回は人文学部の特に地域にかかわる部分では説明させていただきましたが、説明しきれなかった部分もまだありますので、それはそれでまた別の機会にでも意見交換させていただければありがたいと思えます。

最後にですが、まだ実は言い足りなかったとか、そういうところがあるかもしれません。前をお願いを差し上げたと思えますが、総評という形で申し訳ないんですがまとめていただきたいというのがありますので、もっと言いたいことがあるという場合は、またその辺りでぜひ入れていただきたいと思えます。

では、今日はいろいろご意見をいただきまして、本当にありがとうございました。私たちはそれをきちんと認識しつつ、また検討していきたいと思えます。以上とさせていただきます。どうもありがとうございました。

【司会】 それでは、これで外部評価を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。(終了)



## 第7章 外部評価総評

### 鮎京正訓委員

1. 三重大学は、三重県のみならず中部地域の基幹大学の一つであり、三重大学人文学部は、地域の期待に応え、多くの優れた人材を育成し、輩出してきた歴史を持っています。

2. 現在の大学教育をめぐっては、大きくは二つの重要な責務があるように思われます。一つは、グローバル化の時代に即した教育、研究活動の発展であり、もう一つは、地域の振興にどのような寄与をなしうるか、という課題です。

3. グローバル化に伴う課題は、様々にありますが、特に在学生の外国への送り出し、留学ということに絞って問題を整理すると、少なくとも外部評価の会合でお聞きした印象で言えば、まだ十分ではないような気がいたしました。多くの私立大学などで、在学生全員が一度は留学することを義務付けている昨今の傾向からすると、さらに、在学生の外国留学の取り組みがなされる必要があるように思われます。もちろん、学生を外国に留学させれば良いかという、決してそれだけでは十分ではないことは、理解しています。

学生を留学させるということは、学生にたんに外国語を習得させることだけが目的ではありません。学生が一旦は日本という国から離れ、異文化という厳しい環境に身を置き、そして、そのプログラムの中で「魂が揺さぶられるような経験」をすること、そしてその経験を通じて、自分を新たに発見することが最も重要な目的です。もっと言えば、学生にそのような経験をさせる上では、教員自身がそのような経験を体験していることが必須であると思います。

グローバル化をめぐっては、様々な意見があるかと思いますが、学生を成長させる、という観点から、ぜひ一層の検討を行っていただきたいと思います。

4. 地域連携、地域貢献という点で、三重大学人文学部は、先進的であるという印象を受けました。三重県の観光地、博物館との連携など、他の地域の大学ではなかなか見出すことのできない重要な取り組みをしておられることに感銘を深くしました。

三重大学がこのような課題に積極的に取り組まれている背景には、桑名、松阪、伊賀上

野、鳥羽などなど、観光だけではなく本来的に極めて高い文化的、歴史的な背景がある土地柄に密着した地域連携戦略を掲げておられるからだと思っています。

地域連携という課題にとって重要なことは、大学が地域と密着した活動を行うことを通じて、いかに学生が地域に関わり、地域から学び、学生の多面的な能力を向上させることができるか、という点です。この分野では、すでに多くの取り組みがなされていることは、知っていますが、さらなる努力をしていただければと願っています。

## 5. その他

三重大学人文学部の広報戦略は、極めて秀逸であると感じました。特に「TRIO」誌の定期的な発刊は素晴らしく、また、編集及び体裁も群を抜いた水準にあります。現在の大学、特に国立大学法人は、国民に教育研究活動の実際の姿を見せ、また大学の研究の成果を還元していくことが強く求められています。したがって、大学における広報活動の意義は、従来以上に強化する必要があります。

三重大学人文学部の一層の発展を大いに期待します。



## 東則尚委員

人文学部は 1983 年の学部設置以来、学部理念の実現を常に志向しながら、文化学科での専修制導入、法律経済学科での学科名変更やコース制導入等、種々のカリキュラム改革に取り組み続けてきました。これらの改革に通底するのは、カリキュラム・ポリシーとしての「履修の系統性の確保」と、ディプロマ・ポリシーとしての「グローバル人材の育成」であるように思われます。これらを中心にして以下に私見を述べます。

### 1 履修の系統性の確保について

履修の系統性の確保は、人文学部の目的が「人文社会科学の諸分野において学際的、総合的な教育研究を行うこと」と学部規程に示されているように、学際性と総合性という 2 つの特性から要請される必然であると言えるのかもしれませんが、対象とする学問領域の広いカリキュラムのなかで如何に系統的に学ばせるか、その仕組みづくりが学部カリキュラムの成否を分ける最も重要な要素であるように思われます。

今から 30 年以上も前のことですが、私は当時の文部省の派遣で一年間、オーストラリアの Canberra College of Advanced Education（今は廃校になって存続していません。）で学ぶ機会を得ました。科目履修登録の前に同大学のアドバイザーから分厚いシラバスを渡され、その情報量の多さに圧倒されたことがあります。科目ごとに目標、履修の内容・方法・形態、評価方法、使用テキスト等が詳細に記述されているだけでなく、履修要件としての既修科目や履修後の推薦科目等も示されていました。シラバスを読むだけで履修のガイダンス機能が十分発揮され、読み込めば各学問領域の全貌を一望できるような感覚にもなり、このシラバスとの出会いはとても新鮮で感動的な異文化体験でした。

また、その大学では、どの科目でも基礎的・基本的な内容を受講学生全員が講義形式で学ぶ lecture と、lecture との有機的な関連を図りながら実際の・応用的な内容を少人数で学ぶ tutorial を別時間で開設し、両方で系統的・計画的に学習を進めていくのですが、lecture の内容・方法が特に素晴らしいと思いました。どの科目でも最初の lecture でシラバスを補完する詳細なリーフレットが配付されて科目の全体像が先ず示され、その後の lecture では毎回、学問的な説明・分析等に必要な概念・理念等が見事に整理されたハンドアウトが配付され、授業も指導者が学生の理解状況を確認しながら丁寧に進めてくれました。私は学生時代に教育社会学のゼミを受けていたので Sociology of

Education という科目を選択したのですが、この科目の lecture を受講して初めて社会的な教育問題の見方・考え方というものを理解できたように感じました。学生時代に受講した講義・演習・ゼミではそのような感覚になったことがなかったので、大きな満足感を得たことを覚えています。

さらに、履修形態も多様でした。例えば Sociology of Education では最後の lecture の時間に、tutorial 対抗のドラマコンテストがありました。各 tutorial の受講学生全員で教育に関するテーマを決め、シナリオを書き、15分程度のドラマを演じ、互いに講評し合うというものです。ドラマ発表まで何度も話し合いを重ねることで履修内容の定着を図ることができ、コミュニケーション能力の向上も意図されていたのかもしれませんが。また、Bilingual Education という科目では、lecture で学んだいくつかの TESOL (Teaching English to the Speakers of Other Languages) の指導法のうち一つを選んで輪番で模擬授業を行い、児童生徒役を演じた学生が児童生徒の視点で授業の感想・意見を述べ合い議論するという時間が何度もありました。

このような個人的な体験を振り返りつつ「履修の系統性の確保」の観点から人文学部のカリキュラムを拝見すると、1・2年次に履修する「スタートアップセミナー」、文化学科の「地域文化研究総論」、法律経済学科のアクティブラーニング関係各科目等の基礎科目に加えて、特に 2017 年度新設の必修科目「地域から考える文化と社会」と「専門 PBL セミナーA, B」が注目されます。当該新設科目では、2016 年度後期特殊講義「地域から考える」の目的に示されているように、「地域の抱える社会的諸課題や地域固有の文化を理解する上での学問的視点」を身に付けることに重点を置くことが大切であると思います。何故なら、この「学問的視点」を入学年次の早い段階で習得することにより、「スタートアップセミナー」等他の基礎科目での履修の相乗効果と相まって、各学科・コース等での学習のベースが形成され、それ以後にどのような専門科目を選択しても「履修の系統性」を確保しやすくなると考えられるからです。これらの新設科目と各基礎科目を今後どのように発展させていくかが「履修の系統性の確保」の鍵を握っているように思います。

## 2 グローカル人材の育成について

人文学部の両学科の目的は、学部規程で「国際社会と地域社会の発展に貢献することを目的とする」と同じ表現で文末に示されています。人文学部ではグローバル人材と地域人材の育成、すなわち「グローカル人材」の育成が目指されているわけです。したが

って、人文学部の目指す人材像は、卒業後にどのような職業生活・社会生活を送ろうとも、今いるその場所で、身近な地域のローカル課題をグローバルな視点で見つめ直したり、逆にグローバルな課題をローカルな視点で見つめ直したりして、諸課題を「グローバル」な視点で解決しようとする能力と態度を身に付けた人材であると解釈できます。

私は勤務校の上野高校で、伊賀の誇りを継承し伊賀の地方創生に貢献する生徒を育てることを目的に、放課後の課外活動として2つの「上高ゼミ」（「伊賀の文学探訪」「伊賀グローバルスピリッツ」）を立ち上げました。ローカルプライドを有する地域人材を高校生のうちから育てていこうというわけです。特に「伊賀グローバルスピリッツ」は、世界各地に工場を持つ地元のグローバル企業の経営者による講話を核に据えて、自分の生活課題や地域の課題等のローカル課題をグローバルな視点から俯瞰することを通してローカル課題がグローバル課題と無関係ではないことに気づくこと、また、グローバル課題の解決のためには自分の生活課題や地域の課題を解決しようとする実践者になることが必要であることなど、ローカル課題とグローバル課題の相互補完的な関係を理解することを目指しています。

このような個人的な取組を踏まえつつ「グローバル人材の育成」の観点から人文学部のカリキュラム改革を拝見すると、地域と関連の深い特色ある授業やゼミが多様に展開されてきており、大きな成果を上げていると思います。そして、やはり2017年度新設の必修科目「地域から考える文化と社会」が特に注目されます。この新設科目を今後どのように発展させていくかが「グローバル人材の育成」の成否の鍵を握っているように思われます。

### 3 その他

人文学部はこれまで、学部教育のハード・ソフトの両面にわたって様々な改革・改善に取り組み、成果を上げ続けています。特に、地元地域等との連携を通じた社会貢献活動は目を見張るものがあります。ところが、これらの地域連携・地域貢献の活動は、どのようなプロセスを経て取り組まれることになったのか、どのような活動が展開されているのかなど、その経緯や内容はあまり広く知られていないように感じるのは私だけでしょうか。今後の広報活動の工夫が望まれます。

また、人文学部の今後に大きく影響を及ぼす要素として、入学者選抜の在り方も重要であると思います。特に個別学力検査において、前期選抜では国語、数学、英語のうちどれを課すのか、後期選抜では小論文だけを課すのか教科と組み合わせて選択にするの

かなど、これらの入試教科等の判断が他大学との競合状況に大きく影響を及ぼすと考えられます。国における高大接続改革の動きにも十分注視され、目指す学部像を実現するためのアドミッションポリシーの一環として、適切且つ戦略的な判断が望まれます。

以上、今後の三重大学人文学部の益々の御発展をお祈りして総評とさせていただきます。

## 中井茂平委員

三重大学人文学部の外部評価委員として、初めて人文学部の学生、大学院生への教育内容や地域課題への取り組みについての説明を受けました。まず今までの過去五年間程の資料ならびに就職データ等を頂戴し、人文学部として如何に改善、改革に取り組んできたかを勉強させていただきました。

今回の外部評価テーマは、「人文学部における地域人材の育成」でした。国を挙げて地方創生が叫ばれているこの時期としてはとてもふさわしいテーマであり、且つ人文学部が以前から取り組まれている多くの事例に驚かされるとともに、地方における地域活性化には大学機能の役割が欠かせないのではということを知ることができました。

人文学部としてこれまで人材育成並びに地域の活性化に大変前向きに、積極的に取り組まれてこられていることを高く評価いたします。以下、ご説明いただいた各項目につきまして感想、意見を申し述べさせていただきます。

### 1. 安食学部長による学部理念の説明

人文学部の規程に「変動激しい現代社会への深い理解」や「公私の領域において、変動する社会の課題に挑戦する積極性を備え指導性を発揮できる」人材を育成するとあり人文学部の教育を通じた人材育成に大変力強い意欲を感じました。

### 2. 学部カリキュラムと地域人材育成（服部教務委員長）

文化学科では世界を大きく4つの地域にグルーピングして研究課題としています。これは学生達に常に世界に目を向ける意識付けとしてとても良い方策に見えました。又、地域文化を学ぶために学生には地域必修科目（日本の思想、歴史、言語、文学、社会、風土と地誌、考古学）が設定されているとのことでとても良く練られていると考えます。さらに専門分野ではこれらの延長線上の科目が設定されており、学生もステップを踏んで学べるシステムになっていると感じました。

法律経済学科においては、地域と関連の深い特色ある「地域環境論」や「地域経済論」などの授業やゼミを実施していることが良くわかりました。今後の改革としても「地域から考える文化と社会」という必修科目を新たに設定するとのことで、学生が地域に出て地域の歴史や人物、現状を調査・分析することで地域理解力が大変高まることと考えます。いずれにしろ学生の持つ好奇心を如何に地域に結び付け、そのパワーを引き出すかがポイントで先生方のご指導力に期待するところです。

### 3. 授業外における学生支援について（上井学生支援部長）

学生への就職支援、キャリア支援は、どの大学でも行っていることと聞いていましたが「就業力をつけよう」と15回も就職支援講座を行っていることに驚かされました。学生の一人一人に考えさせ、自己分析を行わせて就活に、そして社会に巣立つように指導していることが素晴らしいと感じました。三重県には大手企業も沢山あります。地元就職として大手や中手の企業に入社し、地元の工場に勤務できたとしても、海外進出が盛んな現在、東南アジアや米国、欧州などで入社企業の工場が進出、操業している場合もあります。入社して何年か経過すると海外への転勤のケースもあります。そうすると当人は、三重発世界へと踏み出すこととなり、この点において世界に飛躍する三重大学卒業生に変容することになると考える次第です。各企業も人材育成に努めています。私共の場合は、「魅力ある人づくり」を目指し、人としての「コミュニケーション力」、「主体性」、「あきらめない力」を重視しています。そういった意味でも学生の頃から「自立性」、「自主性」、「自発性」、「粘り強さ」の豊かな人間であれば、三重大学人文学部発の地域人材に留まらずグローバル人材として十分世界に通用することと考える次第です。

### 4. 大学院における地域人材育成（豊福先生）

豊福先生のご指導により三重県の各市町村の特性についての研究を人文学部の先生、大学院生にて取り組まれていることが良くわかりました。そして冊子を拝見いたしますと各市町の魅力が上手く描けており、各地域のテーマがとても地域活性化に重要な要素であることがわかります。この中には、市民や住民があまり気のついていないテーマもあることから地域で死蔵されている課題を紐解くのも三重大学の機能だと気が付きました。本当に良い研究や提言があり、論文だけで終わらずに各市での課題解決への取り組みや普及、実行率を再度調査してはと考える次第です。こういった論文集の発信機能も三重大学の定着化、信頼性向上に重要な要素かと考えます。配布先は質問できなかったですが、各市町の市長や議長で終わらないで市町の担当関係部署、各議員、商工会議所や商工会、地元の高校や図書館への配布や地域のケーブルテレビや一般紙にもお配りして話題性を高めては如何でしょうか？ 又、院生の皆様の研究課題を総合的に加味した市町村力などの総評も別途お付けいただければ住民として気の付くことや方向性を見いだせることと考えます。三重大学にとっても学生の好奇心と地域課題を結び付けフィールド活動を行なうことは、現在や過去の人材、人物を学生が学ぶこととなります。東京や都市部ではなく地域で活躍している（した）身近な人物を知ることで学生もより成



長します。三重大学だからこそこのような地域特性や人物について研究し、学問の世界から課題を抽出して新たな産学官連携を構築することができると思います。

<まとめ>

以上、幾つか書かせていただきましたが当日にも申し上げさせていただいた通り、定性的なレベルの高さにつきましては、さすがに三重大学だと思います。しかし定量的な部分として学生、院生の参加率や先生方として人材育成カリキュラムへの先生方の人的協力度や参加率、そして地域課題を研究テーマとした先生、学生の取り組み率など、もう少し人文学部全体の教員数や学生、院生数からの率による地域課題への取り組みを知るために定量的に表記できそうな項目は数値も挙げていただければと思います。その数値の年度毎の推移や向上を「見える化」していただければさらに素晴らしい人文学部全体の取り組みが拝見できたのではと考える次第です。ステップを積み上げての教育カリキュラムと緻密な就職支援、地域まるごと再発見を目指す「地域発掘研究」を私も勉強させていただきました。今後の三重大学人文学部の益々のご発展と学生お一人お一人の「地域人材の育成」が成就されることをご祈念申し上げます。有難うございます。

## 松田健委員

三重大学人文学部において、「地域」をキーワードに、総合的な研究と人材育成をされていることに対し敬意を表するとともに、自ら教育改革に積極的に取り組み、学生に対する支援体制の充実に努められていることに対し、高く評価したいと思います。また、この取り組みにより、学校と学生の距離が近くなっているという印象を受けました。

大学の目的は、専門的知識と豊かな教養を醸成し、社会で活躍できる人材を育成することであり、その達成のためのカリキュラムを作成し、学生の教育に努められています。私からは、地元企業としての期待を交えてそれぞれの評価項目について記述させていただきます。

### (1) 学部カリキュラムと地域人材育成について

人文学部においては、少人数教育と、「地域」をテーマにした野外学習やフィールドワークを中心とした教育という特色があります。「少人数教育」では学生の主体的学習中心の「グループ討論」などによりコミュニケーション力が醸成されます。また、「現地に出向いての実践的演習は深い洞察力や広い視野を育てる効果があります。

カリキュラムは、テーマの対象となる地域に着目した文化、法律、経済などを学べるものとなっており、研究の過程で愛着が生まれ、真摯に向き合う、その地域に役立つ人材が育てられることが理解できました。

また、今後の改革において、来年度より2項目のカリキュラムの変更を行い、人材育成と学際的・実践的教育の強化を目指されています。不断の改革を積極的に行われており、成果に期待するところです。

### (2) 授業外における学生支援について

就職支援についての手引き、インターンシップガイド、ハンドブックなどそれぞれのツールは充実し、学部の支援体制もとても厚いと思いました。

人文学部の就職状況について、希望者の就職率が98%を超え、地元を中心として様々な業種で活躍されていることは、支援の努力が結実されているからであると考えます。

ただ、大学生全般の傾向かと思いますが、企業側としては、受験生が画一化されてきたように感じます。就職はゴールではなくスタートであることを念頭に、企業としての入社

後の教育の課題でもありますが、学生の時にもそれぞれの長所や個性を発揮できるよう、日常の教育や就職支援を進めていただければ有難いと考えます。

### (3) 大学院における地域人材育成について

大学院改革に伴い、「三重の文化と社会」についての科目を新設され、地域連携と教育の融合を目指し、フィールドワークを中心に深く研究し、成果を発表されています。

市町をテーマとした研究は、地域を深く理解し、活躍する人材を育成します。学生には研究した地域に対して第2の故郷であるような意識が生まれるでしょう。一般の人にとって、論文は正直難しく、敬遠しがちですが、その要約を「TRIO」にわかりやすく掲載し、身近に感じさせる取り組みになっていることに感銘しました。

最近、三重大学と自治体、地元、企業などがコラボしている取り組みも多く、地域の大学として活躍される機会に触れることが多くなってきましたが、今後も更にいろんな形で情報発信していただきたいと思います。

総括として3点述べさせていただきます。

まず、常に「PDCA サイクル」を回してより良い体制づくりに努めていただきたいということです。三重大学ではアンケートや、このような外部評価などにより、改革を続け、その結果を教員や学生にフィードバックし、さらなる改善を推進されていますが、環境や時代の変化に伴い、最適な体制も変わります。常にこのサイクルを円滑に回して、その時に合わせた、先を見た体制づくりを推進していただきたいと思います。

次にカリキュラムについて、複数の地域で、また異なるテーマを学習するような機会にも期待いたします。深く追及する力を醸成するほか、多角的、総合的に考える力が育てられるのではないかと思います。将来、仕事の内容や地域が違えば正解や手法も異なります。複数の前提や方法を経験することで、自分の中に多くの「引き出し」を持てると考えます。

最後に、企業としての希望ですが、教育や就職の支援において、変化に対応できる柔軟でポジティブな学生を育てていただきたいと思います。企業が必要とする人材は異なりまますし、時代によっても変わります。30年後、40年後に活躍できる人材がどのようなものかはわかりませんが、どんな環境に変わっても柔軟に対応できる、自分を生かしていける前向きな思考を持てるような人材であってほしいと思います。

学力はもちろん必要です。そして、相手が何を考えているのか、何故そのように考える

のかを理解しようとする「傾聴」と、そのうえで最善と思うことを相手に理解してもらう「説得」、相手を理解した時に自分も変わることを受け入れる「謙虚さ」と「柔軟性」も大切です。三重大学には、ゼミにおける討論やグループ研究など、これらを育てる多くの機会があり、学習を積み重ねて地域に貢献する多くの人材を輩出されることを期待しています。

「評価」という点で適切であるかはわかりませんが、このように考える機会を与えていただき、感謝いたします。

三重大学人文学部外部評価報告書  
— 第7回外部評価 —

2017年（平成29年）3月

編集・発行 三重大学人文学部  
津市栗真町屋町 1577

